を産みしは、一の厩に使用さるゝ、岩窟にして、搖籃として用ひたるものは、實に陋しき馬槽なりしなり。

謫流の苦痛、　マリヤは産後間もなく慘酷なるヘロデの迫害を免れんが爲めに俄に愛する鄕國、家族に離れて遙々知らぬ埃及國に行き、茲に數年を暮さざる可からざりき。

愛する者に別るゝ苦痛、　マリヤが迷兒となりし基督を搜さんが爲めに、三日の間彼は彼處、此處と。ゼルザレムの町を尋ね廻り居りし間の苦痛は、如何ばかりなりしか、聖子基督が今頃は如何になりしやらんと、其憂慮心配は到底筆にも口にも盡すこと能はざるなり、マリヤが聖子を己が子とし、我が神として愛せし事は、何者も之に比するに足らざる程

なれば、それを見失ひたる時の悲しみは、又他の者の比にあらざるなり、彼の殉教者が艱難を受くるに當りても、天主に對する愛に依りて、幾分之を和かにするを得たれど、此の場合に於けるマリヤの苦みは、之れと正反對にて、全く非常に天主なる御子を愛するよりして起りしものなり。

基督の苦痛、悲哀、等又基督が受けし迫害、讒謗、等は悉くマリヤの心の上に落ち來りて、之れを苦しめ悲しましめたり。

然れどもマリヤが感ぜし最も辛き苦痛は、其愛子の慘酷なる最後なりき。しかも此辛き苦しき、マリヤは二度迄嘗られたるなりき。初めの苦痛と云ふは、聖子の慘酷なる死の有樣が三十三年の間、聖母の思想中にありて、除ろに之を苦むる

こと恰も眞綿にて首を縊るが如くなりしなり、實際マリヤは聖ブリヂッタの啓示によりて、久しき以前より基督の苦難の有樣に就いて、詳細に之を知ることを得たれば、かくも美はしき、かくも愛らしき、かくも無邪氣なる愛兒が何日か此世の罪惡の犧牲となり、其流血を以て、萬代、萬人の血を洗ふべき時來るべしとの考へを、拂去らんとして、拂ひ去る能はず、獨り孤燈の下、此事を考へて悲哀、愛憐の情、むら〳〵と起りて、堪へ難からんとせしと、幾回もありしなるべし。偖愈此の懷かしき時、かく永き間、思ひ煩ひし時の來るに及で、マリヤの悲痛は如何なりし、憐むべき、マリヤの心は今や鬼火跳る悲哀の海に漂ひ、暗瞻たる痛苦の淵に臨めるにあらずや、山裂けん、海も涸れん、されどマリヤの苦痛は終に慰むるに由なかりしなり。

憐むべき聖母は、今や其一子を失はんとす、彼の兒奪はれたるは病の爲めにあらずして、奴婢等の惡意によりてなり、彼子は恐るべき苦難の中に、葬去られ、マリヤは實に此の苦を目睹せざるべからざりき。否之を見るに絶へずして、此場を去ることは慈愛に充てる母には到底不可能なりき。彼女は今や、其愛子の身躰は打擲の爲めに、肌膚破れて、碧血流れ、頭には棘の冠を冠らせられ、美はしかりし顏も今は唾と鞭撻とによりて見る影もなき有樣となるを見つゝあり、彼女は今や惡漢等の口々にのゝしり罵詈、嘲弄、呪詛の言葉を聞

き、手足に釘を打ち込む鉄槌、慘虐の響を聞きつゝあるなり。彼れの心悲嘆の爲めに、今や破られ、裂かれ、蹂躙されたりなど云ふも、中々愚かなり。更に十字架の下にある、憐む可きマリヤを見よ、十字架にある愛子は、四肢を釘けられて、天空に懸り、頭より足に至る迄、肌膚として傷なき處はなく、顏容全く變りて、もはや昔日の面影なし、是れをしも慘酷と云はずんば、何をか慘酷と云はん、是れをしも悲酸と云はずんば何をか悲酸と云はんしかもマリヤは之れを慰むることを得ざるなりき。

誠に思ひ見よ、世の常の母としても、其愛する子、今や此世を去らんとするに當り、冷たき汗の其の額に滲み出づるを見ては此を拭ひ遣ることをも、切めてもの慰めとす可し、マリヤも亦心には如何にかして聖子の傷疲より流るゝ血を止め度きものと思へども、人之を許さねば、詮方とてもなし、母は其子が臨終に當り、手を枕邊に伸ばして、愛兒の顏を擡げやるを常とすれど、マリヤは、耶蘇の苦痛に充つる頭を支ゆることすら能はざるなり、普通の母ならば何にか元氣を付くるものを其子に與へて些かにても苦痛を緩やかにするを得れど、マリヤは之に反し人が其子に苦汁と、醋とを與ふるを見たり、嗚呼悲嘆の母よ、爾の苦痛に比すべき苦痛世にあるべきか、聖會は之の無量の苦痛を、大洋に譬へたり、實にマリヤの苦痛は海の如く、無邊にして深く、且つ苦し、又聖ベル

ナルヂノは、マリヤの苦痛の深厚なりしことは、非常にして、若し之を幾十億分して、世の人の各に分ち與ふる時は、其一部分に受けたものと雖も、之に堪へずして直に死すべしと云ひたりき。

偖マリヤは如何にして、凡て此等無數の苦痛を耐へられたるか、我等は其の勇敢なる忍耐と、失意に服する心とを、賞嘆せざるを得ざるなり、一言に云へばマリヤは基督と共に在りたれば殆ど基督の如く苦みたり、而して是れが爲めに、一言たりとも口を開きて、不平を訴ふることなかりしことも、亦基督の如くなりき。實際マリヤは己と共に在りし天主が、己に與へし運命に對して不平を云ふこと能はざりしなり。

彼女は只全く神意に服したるなりき。即ち彼女は只天意に服したるのみならず、何事にも天主の聖意を受けしが故に、更に近づきて天主が彼女に送り給ひし總てのものを喜びて受けたり、マリヤは苦痛も、歡樂も、共に只吾人の最大幸福の爲めにあらざれば天主より與へらるゝ事もなく、許さるることもなきを知れるのみならず、又能く苦痛の價を知れり、苦痛が功德の要素なる、天國に達する最も慥かなる途なること、罪を贖ひ世を救ふ爲めに必要なる條件なる事を、知れるなりき。彼女は又後に聖子基督が、苦痛、貧窮、迫害に付いて語るべき所の者を知れり、基督が世を贖ふ爲めに、苦痛を受くべきことを知れり、苦痛は天國に於て無限の幸福を得

せしむるものなることを知れるなりき、嗚呼マリヤは總て是等のことを知りて、啻に絶念せしのみならず、啻に天主の命令を承諾せしのみならず、心の底よりの歡喜と幸福の念とを以て、之を受けたるなりき。

聖ポーロ嘗て、自ら語りて『我は憂苦のうちに在りても喜びを以て充さる』と云ひしが聖人は、往々己れの事業の報酬として苦痛を得んことを願つたり、聖テレジヤは『苦しむか死するか』と云ひ聖マリヤ、マグダレナ、ド、パッヂは『我は死を求むるよりは、寧ろ苦痛を求む』と云ひたり、是等の聖人は勿論特別の聖寵を受けてかくの如く語り得しものなるべしと雖も、吾人は聖マリヤが是等の聖人よりは、更に大なる聖寵を受け從ぶてマリヤの苦痛に對する恩情は、一層完全なるものなりし事を信ずるを得可し、即ちマリヤは其生涯中のあらゆる苦しき境遇に於て、特に十字架の下に於ても、その天主なる御子と結び合ひたり、マリヤの意思は恰も聖子の意思の如くに、假令如何に辛き苦痛を感ずることあるも、喜んで之れに堪へ忍び、若し天主の御許さへあらば、死をも辞せずと云ふ程なり。

然れども單にマリヤの絶念せしこと、及び忍耐あるを嘆賞するのみにして止むべきにあらず。尚ほ及ぶ丈け之れに倣はんと努めざるべからず、マリヤは凡て吾人の龜鑑なれば、若し吾人にして彼女の保護恩寵及びマリヤに類するもの

に、天主が與へ給ふ賞與を受けんと思へば、全力を盡して此摸範に倣ふべきなり、已に述べしが如く、人苟も現世に在る、以上如何にしても、苦痛を免るゝ事能はず、故に此忍耐の德は誠に必要にして、凡て此等の苦病を以て却つて我等が功德を積む基となす樣に心掛くべし。よし吾人は全く完全にマリヤの忍耐に倣ふを得ずとも、少くとも彼女の助力を願ひ、彼女が受けし苦痛の如何に大なるかを想起して以て、彼女の天意に服せんこと及び苦痛を甘受せしことを、學ばざるべからず、例へば貧窮に苦しめるものは、ナザレットに於けるマリヤを想ひ起すべし、マリヤに些も不平を洩すことなくして、聖ジョゼフと共に日夜働きたり、聖子基督も生長

の後には兩親を助けて、卑しき業を自し給ひしが、聖ジョゼフの死後は、只マリヤと基督二人の手にて、暮を立てられたるなりき。又他人が自己に對する待遇の惡しきを苦とするものはベトロエム及び埃及に於て、マリヤはかく如何に天意に服し、忍耐を以て之に耐へたるかを追想すべし、其他自己の愛する小兒を失ひ、兩親に別れたるものは、マリヤに於て最もよく天意に服するの摸範を見るを得べし。人は如何なる種類の苦痛、困難に遇ふとも常にマリヤを眺め、マリヤの事を考ふれば、自から之に堪へ忍ぶの力を、得可きなり、マリヤは實に總て天主の命じ給ふことを甘じて受け、何事にても皆な天の攝理より來たるものにて、天主は人に苦痛を

第四章　マリヤの忍耐

與ふるときは、必ず後に之を賞し給ふ可きを信じて之を受け、又總ての者を皆な罪の贖として受けたりき。此の罪の贖と云ふも、決してマリヤ自分の罪にはあらずして人類一般の罪の贖ひなり、聖マリヤの例によりて、人が罪を救はれて後に天主より賜はる最大の聖寵は、天主を愛する爲めに苦痛を忍び得るの聖寵を受くることを、忘るべからず。嗚呼悲嘆の母にして最も忍耐なる童貞よ、我をして現世の避くべからざる苦痛、困難の中に於て、天意を怨まず、忍耐することが如何に尊きことなるかを、知るの聖寵を得せしめ給へ。罪の汚濁を知らざる爾すら、少しも訴へ呟くことなくして、あらゆる苦痛、あらゆる憂悶を耐へ忍びたりき。我の如

き罪深き者が、如何にして天主の與へ給ふ、總ての苦痛を喜ばざる如きことはあるまじきことなり、故に我は屢々爾の悲嘆を回想し爾の忍耐に倣はんと決心せり。

第五章　瑪利亞の信德

信德とは超性的美德にして天主の言語にのみ賴りて其の啓示し給ひし所を信ずることを云ふ。

信仰は天主の賚賜にして聖靈の爲めに必要欠べからざるもの也、基督嘗て宣はく『信仰し洗禮を受くるものは救はれん』と、又聖ポーロは信仰なくしては到底天主の聖意に協ふ能はずと云へり。聖書の中には信仰の必要にして又甚だ貴重なることを書ける章極めて

多し。信仰は靈魂の生命の要素にして又根本なり、故に信仰が深ければ深き程靈魂の生命は大なるものとす、基督が此の世にありし間に非常に此の信仰に就いて重きを置き給ひければ屢その事を語られたり即ち或は『信ずるか』と云ひ或は『信仰する者は何事にても叶へ得ん』と云ひ『嗚呼女よ汝の信仰は大なり我の望は叶へらる』と云ひ又使徒等に向ひ『若し汝が芥子粒程にても信仰を有するならば山をも移すを得べし』など宣ひしことありき。

信仰は來世に照らす光明なり、信仰なき者は只此世のものを見るのみにて恰も薄暗き蠟燭の光を以て四方鎖された土藏の中にある人が麗はしき太陽を浴びたる外部の世界を見ること能はざるに似たりと云ふ可く、目に視る總てのものは何處より來たり何處に存在するか又何處へ行くものなるかを知る能はざるなり、信仰なき時は靈魂は恰も四周のものを見ることを妨ぐる濃霧のうちに包まれたるが如く、天主、靈魂、靈魂の世界、天國、地獄、無限などの超世界を總て悟る能はずして彼の靈魂の半分以上は既に死せるものなり。

吾人は天主が吾人に信仰を與へ又是れに依りて天國の永遠の福樂に達するの方法を與へ給ひしを感謝せざる可からず。此の恩惠は實に總ての恩惠のうちに於て最も高貴に且つ最も大なるものにして其價は到底計知るべからざる

なり、從ふて吾人は此の貴重なる信仰を天主の助力に依りて維持し且つ增大する爲めに最も力を盡すことを忘るべからず、偖て是が爲めに最も善き方法は何にぞと云ふに即ち聖母マリヤの感嘆す可き信仰を鑑みることなり。

マリヤの初めて母の胎内に宿されし時より既に聖靈は、天主に就て又天主の完全なること、天の攝理、救世主及び其他の事に就て非常なる光明を彼女に與へたりしがマリヤは偏ら柔順に總て是等の聖靈の啓示を受け且つ之れを利用せしを以て、此の光明は日々增加し行くのみなりき。其他マリヤは極めて幼き時より力を盡して其信仰を增さんと心掛け絶えず祈禱せしは勿論聖書をも深く研究したりける

が故に後に至りて己が信仰を示す可き時來りし時其順氣なることによりて天主の聖心を喜ばしめたりき。

マリヤの胎内に天主の御子が降られしことは全く一の信仰旨條なり、大天使ガブリエル天主の命を受けて彼女に告げて天主は彼女を以て母と撫し給へりと云ひしとき、マリヤは瞬時の内躊躇ひしも之れマリヤが天主の御依賴の趣きを信せざりしが爲にあらずして只マリヤは甚だ童貞を愛し之れを失ふ事を惜みしがば茲に天主の母とならば或は之を破らざる可からざるやも知れずとの懸念ありたればなり、然るに時を移さず大天使は彼女に向ひて天主の全能により童貞を破ることなくして天主の母となり得可し

と告げたり、之れ實に信ず可からざる不可思議の事にして常人ならば容易に信とす可からざれどマリヤは此物語を聞き終り直に答へて『さらば私は諾はん私は主の婢なり大命の如くなれかし』と云へり、信仰を尊めるものにあらざれば何んぞかくの如くなることを得可き、世に之れ程天主の命に從順なるものあらざる可く、之れ程天主の全能を厚く信ずる者あらざるべし、勿論彼女は生物自然の有樣に於てばかゝる事は出來得可からざることなるを知れども又全能の天主に取りては如何なることゝ雖もなし得ざるべきこと無を知れり、されば天主の語を信じたると同じく又自ら『大命の如くなれかし』と云ひし刹那に於て早く天主が其

其中腹に降り給ひしことを信じたり。

昔の太祖等の信仰は聖ポーロも云ひし如く甚だ讃美すべきものなれどマリヤの信仰は此れと比較にならざる程遙かに大なり、之れ天使がマリヤの信ぜし事を求め給ひし事柄は太祖等の場合のものよりは遙かに信じ難きものなりければなり、嗚呼かくの如き殆ど全能と思はるゝ如きことを信ぜしマリヤは幸福なる哉。

又マリヤのベトレヱムに於て愈聖子を厩の中に產み落しその馬槽の中に横はれるを見たるとき、之を天主の子否天主として深く禮拜したり、又此の最初の信仰の結果として天主がマリヤに命じてヘロデの怒りを避くるが爲め此の

小兒を埃及に連れ行かしめし時にマリヤは即ち之れに從ひたり、併し此の艱難に際してもマリヤは一日瞬時の間も全能の天主の子を伴へるものなることを疑はざりき。其後再びナザレットに歸りて御子基督が智識も身躰も共に發達して成人し、職を覺え聖ヨゼフと共に勞働せるを見てもマリヤの信仰は秋毫も減ぜざるのみか益增大せるのみなりき。マリヤは基督の成人するに從ひ益々之を以て人目に隱れたる天主なりと尊敬愛し天主の賢明なることを感嘆したり。マリヤが益々深く基督を以て天主なりと認たればこそ益々深厚に基督に對する注意慈愛を表はし、基督に對する愛情は漸く深くのみなり行きたるなれ。マリヤが言葉

數少なかりしは之彼女がかく自ら卑しくし自ら隱せる神の前に於て尤も深き禮拜に恥いりつゝありたればなり。斯くの如くなればマリヤが福音中にある如き凡ての敎訓を信じたるは今更ら玆に之れの必要もあらざるべく、彼女は既に聖子が人々に說し處の事を皆な實行しつゝありき。即ち基督が山上に人を集めて『精神の貧しきものは幸なる哉、溫和なるものは幸なるかな、淸き心を有てるものは幸なる哉』と云ひ又『若し我に從はんと欲するものは自らをも放棄すつべく、十字架を擔ふべし云々』と云ひしとき、基督は少なくとも彼の母は之れを信じ之れを了解し而して更に之等の敎訓を實踐したりし事を知り給へり、マリヤは奇蹟を

俟たずして信ずる事を得しなり。

嗚呼マリヤよ爾は御子基督の敎へ給ひし凡てのことを從順に信じたり、從順の大なることは譬へんに物もなし、基督が使徒の一人によりて裏切されたるを見たる時、彼が罪人の如くに酷刑に處せらるゝを見たる時、刑吏の手の裡に以て何人も之れを庇ふものなく、慘酷なる打擲によりて其肌膚の破らるゝを見たるとき、彼が重き十字架を擔はされ、其重量に耐へずして打倒れたるを見たる時、彼が恰も惡人の如くに釘附られて死したるを見たる時、爾が彼の神たること及び、彼の力に付て有せし所の信仰は爲めに些かたりとも減殺されしか、否々爾は十字架の麓にありき而して尙ほ

罪人に對する基督の無限の慈悲を禮拜したるなりき。基督が自ら卑くし自ら其神たることをなすこと大なるに從ふて爾は益々深く心の底に於て彼を禮拜したるなり。

マリヤの信仰は未だ嘗て衰へたることあるなし、基督が苦難を受くるに至るや、彼の弟子及び使徒等は之を見棄てたるもの多かれどマリヤは終始彼と共にありて離るゝことなかりき。彼の聖土曜日に至りても尙ほ信仰を失はざりしは獨りマリヤありしのみ。彼女は斯の如く最も憎む可き惡人よりも尙酷に罵詈嘲笑され盜賊、殺人犯者の伍に置かれたる此の憐む可き人が天主の子耶蘇なることを確信し、棺の中に納められたる冷き遺骸を見ても尙ほ之を以て天主

なる人の神聖なる身躰として禮拜を盡せるなりき。而して當時の人々は或は耶蘇に對する憎惡の情より彼の死を喜び又彼を愛せしものは甚だ悲嘆に沈みたるが何れも耶蘇の死は單に不運に基くものなりと思ひ居しのみなれどマリヤは『彼の墳墓は榮光ある可し』と云ふ豫言者の言を確信し之に就て考ふるに耽けり居たりき。

聖ベルナルド曰はく、『諸人は躊躇せんされど只信仰により て立つ所の者は永久不動にして動搖することなく常に信仰中に止まる可し、彼の聖き週間に於ける終りの三日の間毎夜行はるゝ祭式中にある燭火は先人をして上記の事蹟を想起せしむ、即ち此祭式に在りて聖壇上の燭火が順次に消さるゝは之れ即ち使徒等が漸時離散して其信仰を失ひしことを象り最も高き燭臺の上に在る一本の蠟燭のみ消されずして依然光を放てるはマリヤが獨り信仰を失はざりしを表はすものなり。又或人の言ふ所に依れば土曜日が特にマリヤに献げられたるは之れ聖土曜日に於て只マリヤのみ其信仰を失ふことなかりしを以てなりと云ふ、其他諺に『土曜日には日光が照らぬ事なし』と云ふ如きも亦此の如き起源より來るものなり。

茲に吾人が最も注意す可き事はマリヤの信仰は甚だ實際的のものたりしてとなり、實際マリヤは己の思索、行動、苦痛、生活等は一に信仰に從ふて之をなしたりき。彼女に取りて

は現世の生活は永劫の生命の準備にして死は天國の門戸なりき、又マリヤに取りては困難は最も喜ばしき德の母にして身分に伴ふ義務は功德の源、世の出來事は天の玄妙なる攝理、萬物は神の完全の鏡なりと思はれたり。聖ポーロは嘗て『飲むも食ふも其他何事をなすも皆天主の光榮の爲めになす可し』と云ひしが此の信仰的生活を最も善く實現したるものはマリヤを置て他に求む可からず。聖靈嘗て『義人は信仰に依りて活く』と謂ひしがマリヤの如きは實に眞に信仰に依りて生活せしものにて吾人が摸範とす可きは實に斯くの如き生活を云ふ。

吾人は勿論聖會が吾人に信せよと命ずる所の大眞理を確

信じ天主の聖言に僞なきを信じ之に服從す可きは疑ひなき所なり。吾人は我主基督の敎へ給ひし所を悉く信ずれども日常の行爲がその信仰する所に反せざるもの果して幾人かある、吾人の行爲は種々の點に於て基督の敎訓に反くことの甚しき恰も吾人が彼の言を信せざるが如くにして少なくとも吾人の信仰は充分深厚ならずと云ふも誣言にあらざる也。人は罪科の甚だ惡む可きものにして爲めに天主の聖意に逆ひその嚴罰を免れざるものなることを信ずれども之を信ずる事、尙ほ淺きが故に屢罪を犯すに至る又聖寵は現世に於て吾人が有し得る最も貴重なる寶なりと信ずと雖、之に對して餘り多くの注意を拂はず或は之を保

存し增大し又之を失ひたる時に回復する爲に多くの熱心を以てせざるを見れば或は眞に聖寵其物の貴重なることを信せざるに似たり。我主嘗て言へる事あり。

『富める者は不幸なる哉……富者が天國に入ることの難きは尙ほ駱駝が針の穴を通過するよりも難し、……精神の貧しき者は幸福なる哉』と世人之を信ずるか又此を信じて實行せるもの果して多かる可きか、基督は我が弟子たらんと欲するものは自らを捨て十字架を擔ふ可しと云ひ又自ら高くするものは卑くせらる可く自ら卑くする者は高めらる可しと云へり、世の人之を信ずるか又此の敎訓を實際に守り己が行爲を修むる者果して多かる可きか。抑信仰に行爲の伴はざるものは死せる信仰なりとは使徒聖ヤコボの言ひし所なり故に吾人が是等の眞理を着々實行に上せし聖母マリヤの事を屢考ふ可きなり。而して先づ第一に肝要なるは是等の敎訓の眞理なることを深く確信ずるにあり、若し只淺薄に之を信ずるともかゝる信仰は之を實行するの力を吾人に與ふるものにあらず、或人一日常に聖祭に與るを怠り又告解の秘蹟を受くるを厭へる人に向ひ、汝は基督敎徒なりやと問ひけるに彼れは答へて如何なればかくの如きことを尋ぬるや、我は勿論信者なりと云ひければ、問ひたる人はされば汝を信者と見ざる可し汝は天主を禮拜する行爲とては何事もなさゝるにあらずや、とて

大に之を戒めたりと云ふ。吾人は宜しく聖母の如くに天主を愛し之に奉仕する以外の餘事は悉く皆虚幻なりと信ぜん。天の攝理は吾人の最大幸福に關して萬の事を整へ與ふるものなれば吾人は之に無限の信用を措きて可なり、然る時は聖母の如く吾人も亦天意に服するを得可く如何なる困難に際しても決して不平を漏らす如き事なく又失望落膽に陷る如きことなかる可きのみか恰も悲める小兒が其父の膝下に走りて慰籍を求むるが如く吾人をして益々天主に接近せしむるものなり。

嗚呼、信仰に富める感嘆す可き聖母よ、我をして熱烈にして活氣ある信仰を得せしめ給へ、我が信德は天主の賚賜にして凡て天が吾人に下し賜ふものは悉く爾の取次に依るものなることを知れり故に我は爾に依靠りて我身を終はるに至る迄常に信德を失はず且之を實行に上し死に臨みては聖ポーロの云ひしが如く我も亦「我が旅を終れり、我は信仰を失はざりき、我は今天主がその正義に依りて我に與へ給ふ可き善報を俟つのみと」言ひ得んことを望む。

第六章　瑪利亞の望德

望德と云ふは天主がなし給ひし僞りなき約束を堅く信じて耶蘇基督の功德に依り永刼の生命と是に達する方法とを期待するの德なり、天主は基督の功德の結果として吾人に天國の福樂を與ふ可きことを約し給へり。されど此の幸

福を享けんが爲めには勿論吾人は忠實に天主に仕へ其訓誡を守る可し只吾人の力のみに依りては之れをなすこと到底不可能なるが故に天主は又之れが爲めに必要なる諸種の聖寵を與ふ可きことをも約し給へり。かゝれば吾人は天主の此の約束に就ては少しも杞憂を抱くことある可からず之れ天主は正義にして約束を破るものにあらざればなり。

基督教徒の望德は結局信德に基くものなるが故信仰の深きに從ふて望德も亦益々大なる可く、望德は信德と愛德との連鎖なりと謂ふも可なり。此の德は信德と同じく天主の賜にして甚だ貴重なるものなり。

希望は現世の事物に付て言ふも尚ほ一の大なる寶なりと是れ希望なるものは吾人の四周に落下し來たる幾多の困難苦悶の間にありて吾人を支持するものにして幸福を養ふもの不幸不運を慰むるものなればなり。故に人は何事にても己を希望に導き希望を失はざらしむる如きものを好み希望を有せざる人は不幸なる者にして實際無意味の生活をなすものなり。

然れども基督教信者の望德なるものが俗界の希望に勝ることの遙かなるは尚ほ天國と現世との差造物者と被造物者との差が甚だ大なるが如し。先其希望の目的とする物に付て云ふも基督教徒は抑何を望むものなるや、之れが地上

の財寶にあらざるは勿論なり、是等浮世の財寶は一時吾人を滿足せしむるを得れども忽ちにして之を奪ひ去らるゝことある可く到底之に依て眞正の幸福を得ることは難きのみならず是非共一度は死する時に之を棄てざるを得ざるなり、さらば現世の光榮名譽を望むものなるかと云ふに是等の者は多くは虛僞欺瞞を免れざるものにて到底基督教徒の望とするに足らず、さらばとて又浮世の榮華快樂の如き旦暮を計らざる夢の如く泡の如きものを望むにも非ずかくの如きものは凡て吾人の心を充分滿足せしむること難く常に胸底に何にか物足らぬ心地を殘すものなるが眞の望德はかゝる浮雲の如きものならず遙かに之より高

尙なるものにして天國に入りて天主と共に在らんことを望み又完全無量の幸福、圓滿、不窮の歡樂を希望するにあり。かく信者の望德は俗界の希望に比し其の內容の美なるは勿論其の之に達し得ることの確かさに於ても又遙に勝れり。成程浮世の希望と雖も往々甚だ根據の確かにして實現の疑ふ可からざる如きものありと雖もそれすら尙何にか些細の事件起るか微少の障害生ずる時は如何に美麗壯大なる希望も露の如く消へ累卵の如く崩るゝことあるを免れず、之れ浮世の希望は單に人間に依賴するものにして人の能力には自ら限りあり人心は移り易く其約束は屢忘れらるゝことあればなり、而してかくの如き不確固なる希望

にてさへ之に達せん爲めには甚だ大なる勤勞と苦痛とに耐へざる可からざるなり。

之れに反して基督教信者の望德の基礎は甚だ鞏固確實にして誤つことなく天主の約束に基き、又吾人に天國の福樂を與へんが爲めには血の最後の一滴を流し盡す迄苦しみ給ひし基督の功德の上に基くものとす。故にかくの如き望德が絶對に確實なるは論を俟たざるなり。成程吾人の方面に於ては此の永劫の幸福に達し得るやに付き多少の疑懼なきを得ざる可し之れ吾人は元來孤弱にして常に罪に陷らんとするの傾向を有し、吾人の意思は往々薄弱となりて惡に誘はるゝものなればなり、然れども天主は又此の孤弱

なることに對し及び罪惡に傾ける事に對して救濟の途を與へられたり故に吾人は只天主に對して救靈に對する善意を示せば足る其餘の事は天主自ら之が任に當り給ふ可し此れ實に平易なる事にあらずや。

天主が吾人の救靈の爲めに與へ給ひし扶助の力は吾人を苦しむる敵の力に比すれば遙に大なり、偖天主が吾人の目的を達せしめんが爲めに與へ給ひし多くの方法中に於て先づ第一に希望の御母と稱へらるゝ童貞マリヤの保護を擧げざる可からず。

聖母を稱して希望の御母と云ふはマリヤが諸人に超れて此の德を有して世の摸範たる可く又吾人の希望の根源の

扶助の支柱とも云ふ可きもの即ち吾人の希望の希望とも謂ふ可きものなればなり。

マリヤの望德が如何に大なりしかと云ふ一端を知らんと欲せば宜ろしく彼女が生涯中に屢起りし苦境に際し如何に彼が行動せしかを見る可し、彼女はあらゆる希望に反して希望せり即ち人間としては最早や成功の途絶たりと思はるゝ如き場合に於ても尚ほ希望を失はざりき、勿論彼女は徹頭徹尾天主を信用し人の力を當にすることなかりき、彼女は常に祈禱し、謙遜し凡て天主の求め給ふ所を行ひたるが其他の事は常に貧しき者弱き者の救助に來り給ふ可き天主に打ち任せたり。

例へばマリヤが聖子を懷胎せし時聖ヨゼフは聖靈の奇蹟を知らず又知る事を得ざりしを以て大に之を怪しみ疑ひたるが此時マリヤは聖配の疑惑を解く爲め委細を物語る事を得たりしも、かく辨解したればとてその事柄が餘りに信じ難き事なれば聖配は果して之を信じたる可きか疑なき能はず、故にマリヤは只天主の力によりてのみ、此の不思議を聖配に信せしむることを得可く又天主は必ず此の勞を執り給ふ可しと思ひたれば全く之に打任せたりき。

其後ベトレヱムに赴きし時宿舍を得るを得ずして何處に一夜を過さんかと種々案じ煩ひたるがしかも其心は常に天主と共にありて天主が必らず其の救援に來らる可きを

期したりき、其後間も無くマリヤは老シメオンより失望に陷らしむる如き悲しき豫言を聞きたれども、尙ほ天主に信頼し依りて以て希望の綱を繼ぎ止めたりき。又聖子を兇惡の手より免れしめん爲めに埃及に遁るべき天主の命あり しときにマリヤは其の苦痛の中にも決して天主に對する信用を失はず天主が常に彼女と共に在りて必ず彼女に害あることをなさしめ給はざる可きを確信じたり。

斯くマリヤの望德は種々なる場合に顯たれど其の尤も光輝を放ちたるは耶蘇御苦難の節にして特に其の御死去の際なりとす。此の恐怖可き大暴風雨の中に在りてマリヤは泰然として其平靜を失はざりき。耶蘇の弟子等は其師が十字架上に慘死するを見ては失望に陷りしも獨りマリヤは其の深き希望を抱きて動かざることなく、十字架の下に立て悲嘆に沈みたりしも天主の約束を知り居たれば決して望を失ふ如きことあらざりき。

又耶蘇基督御昇天の後のマリヤを見よ、彼女は人情として或は聖子と別れ、獨り此世に生き殘を望まざりしならんも、使徒等を慰め之れに力を添へ彼等が敎會を設立を助けんが爲めには或は永く此の世に留らざる可からざりしなり、しかも彼女は全然天の意に服し些も失望する所なく、靜に天の定め給へる死時を待たりき。マリヤは又敎會が迫害さるゝを見たれども少しも怖るゝことなく、魔鬼と人間とが

悉く其の力を合せても尙ほ遙に天主の力に及ばざることを知り、又天主が敎會に付てなし給ひし約束を忘れずして其希望の中に確固不拔に留まりたり。之れ基督信徒に取りて實に美しき龜鑑にあらずや。

マリヤの如く基督の約束を想ひ出す可く又敎會は磐石の上に建てられ地獄の門も之に勝つ能ざるが故に決して倒さる可きものにあらざることを確信じ常に深き希望を有せざる可からず。

惡魔が凱歌を擧ぐる時は天主が彼等のなすに任し給ふ如くに見え其勢力を隱し給ふ時又善人が失望し萬事休する

が如く思へると見えたるときと雖も、十字架の下にありしマリヤの如く希望を棄つ可からず、己れが感ずる苦痛は之を悲しむ可しと雖も、爲に天主を疑ふ如きことある可からず如何となれば他日必ず天主は其の至て大なる力を振て凡ての敵を悉く地下に葬り去らる可き時ある可ければなり。汝が心の悲傷に沈み人が汝を見棄が如く見ゆる時又汝が輕蔑され慰籍を有せざる時にも決して勇氣を失ふ可からず、かゝる時は宜ろしく天主に向て依賴する所ある可く、天主は汝を慰むるを躊躇せざる可し。

汝が貧窮不自由の爲めに種々の痛苦を感ずる時はマリヤが如何に之と同樣の事に付て苦まれたるかを追想し此世

は謫流所にして最も神聖なる人と雖も尙ほ多少の苦楚を受くるを免れざるものなるを思ひマリヤのなせしが如く汝も亦天主の爲めに祈禱し、勤勞し苦しむ可し、凡て是等の辛きことは何日か終りを告ぐる日ある可く、汝の行爲を常に監視し給へる天主は必らず充分之れに酬ひ給ふ所ある可し。若し又不幸にして病魔に犯され妻子を養ふ爲めの資料を得る能はざる如きことあるも爲めに不平をこぼし失望に陷るやうの事なく却て如何に望絶たる如く見ゆるも希望を棄てざること肝要にてかゝる時は熱心にマリヤに賴靠る可し彼女は必らず汝の救助に來らん。

又若し汝が疑はれ讒侮せられ、虐待せられたるときはマリヤのなせしが如く全然信用を天主に措く可し、己れに過失なき時は世評の如何に拘はらず平靜に沈着なる可し之れ天主は罪なきものを愛し何時かは必ず天の攝理に依りて眞實は世に明かにさるゝに至る可ければなり。既に上にも述べし如くマリヤは單に望德の龜鑑なるのみならず又望德の動機、勢力、補助者、支柱なり、吾人にして若しマリヤは天主の母としては其の祈願によりて全能力を有し、吾人の母としてはあらゆる母の中の最も同情に富めるものなるを考ふれば、彼女が吾人の困難に陷り、苦痛に沈み、危險に臨めるを見る度毎に必ずや熱心に吾人を救助せんとせらる可きことは疑ひある可からざるなり。之をしも疑ふは沒道理

の事にしてマリヤを侮辱し之に心配を掛くるに等しかるべし、人の子たるものは、己れが危難に遭ふ時に其母は救ひに來らざる可し己れを放任して置く可しと信じ得ざるが如く失望落膽等のことは眞にマリヤを思ふ者にはあるべからざることなり。マリヤは樂國に達する爲めの吾人の希望にして天の門と稱せらる。諸聖人は皆な異口同音に何人と雖もマリヤの守護の下に在るものは亡ぶることなしと謂へり。

マリヤは必要なる諸種の聖寵を得る爲めに吾人の希望となるものにして人は彼女に祈願するに「往々病人の快復」「憂人の慰籍」「基督教徒の扶助等の名を用ふる理由は凡て苦めるもの、惱めるもの、惑へる者困難に際せる者等皆彼女に依りて救はるればなり。其他彼女は罪人に取りては尤も有力なる希望の綱なり、かの現世に於ける苦痛困厄は已に同情を惹くに足るものなれど犯罪の狀態に在るもの、成聖の聖寵を失ひ天主より離れて惡魔の手中に陷りたるものは何者よりも最も多くマリヤの扶助を必要とす可し。苦痛に惱みながらも尙ほ聖寵の狀態にあるものは救かることを得可く天國に入る爲めに多少の功德を積むことを得んかなれども罪人は之に反し常に地獄に陷らんとするの危險に瀕せるものにして基督が血を流し給ひしも亦主としてかくの如き人々の爲めなり。故に善良なる聖母は一刻たりと

も此の憐む可く危險なる狀態より彼等を救ひ出すことを怠ることなし。

他の方面に於て罪人の改悛を欲するものは識らず知らず聖母に依靠るに至るものある也、之れ彼等は一旦天主に反きたるものなれば其逆鱗に觸れたるを恐れ直接に天主に向て赦免を請ことは欲せざれど、マリヤは常に慈愛深く溫良にして愛憐に富みたる母なるを知るが故に、怖るゝ所なく彼女に訴へて取次を願ひ容易に天主の愛顧を回復し得ればなり。又マリヤは彼等の爲めに天主に赦免を願ふのみならず、彼等をして眞實に其罪を痛悔するを得せしむ而して此の事は天主の宥恕を得るには必要なる手段なり。祈禱の中にマリヤの事を『罪人の依托』と云ふは全く之れが爲めなりとす。

吾人は現世の多くの苦痛悲哀の中に在りて吾人の希望となれる母を與へられしことに付て深く天主に感謝し絶ず其の有力なる守護に依賴するの決心を立てん。

嗚呼聖き希望の母なるマリヤよ、我等を改悛せしめ給へ。爾は澎湃たる大洋に於ける燈明台なり、曉の星なる大洪水の中に浮ぶ助命の木片暴風雨の中に於ける安全なる良港と云ふ可きものなり、嗚呼我が母なるマリヤよ我は汝を希望とす、願はくは危難の時に際し我が祈願を聽き容れ給ひて幸福なる永劫の門に我を導き給へ。

第七章　瑪利亞の愛德

愛德とは萬事萬物に超えて天主を愛し又天主の愛の爲めに他人をも我身の如くに愛する德を云ふ。故に愛德は之を譬ふれば二個の枝を有する樹木の如く其枝の一は天に向て上りて天主に達し一は地上に擴がりて人類の上に止る。天主に對する愛と人類に對する愛とは恰も二筋の火焰が二個の異物の上に其活力を活かせ乍らも遂には相合し相混するに至るが如く遂には合躰するものなり此の兩者ともに其天主の心を爐とすればなり。

吾人が天主を愛するは之れ天主が無限く完全にして從て又無限く愛すべきものなればなり而して吾人が他人を愛するは天主が此の事を望み給ひ且つ人類は各皆同胞にして天主の子なるが故且つは天主が別け隔てなく之を愛し給ふを以てなり。

愛德は諸の德力に於て最も美麗、最も優れたるものにして吾人の功德の根源、基督敎の特質とも云ふべきものなり、愛德が凡て他の天主の賜物に勝れるは尙ほ黃金が他の金屬に勝れるが如くなり、

此の德はもと信望二德に基づくものなれど後の二者は此世を去ると共に消滅するものなるにも拘らず愛德は獨り依然として存留す可し、天國に於ては骨て下界に於て吾人が信ぜし處の者を直接に見るを得るが故にもはや信仰な

るもの存ぜず又天國に於て吾人は嘗て吾人の希望みし處のものを得たれば望德も亦既に消滅し去れり、然れども地上に於て吾人が愛せし所のものは天に於ても尙ほ常に之れを愛するを得べし。

愛德は吾人の爲めに天國の門を開くものにして之れ無くしては天主を視之を享有することは不可能なり、使徒聖ポ|ロ嘗て曰へり『よし我最も完全なる言語の賜物を得ると もよし我天使の言語を語るに至るも若し愛を有せざれば只響を完する黃銅の如く銅羅の如くなる可し、又我れにしてよし豫言の力を得最も玄妙なる神秘を知るの智識を有し或は山嶽をも遷すに足る如き大信仰を持つに至るとも

若し愛にして欠くる所あらば我は物の數にも入らぬ價値なきものとなるべし。又我總ての財產を貧困者に頒ち施すも敎の爲めに我身躰を火焰の中に投ずるとも若し我にして愛を有せざれば是等の善行は我に取りて天國に入る爲に何等の貢獻にもならざるべし』と。

此愛の德も亦信望二德の如く超性的の善德にして吾人の力のみにては之れを得ることも之を行ふことも能はざるなり。此の德を吾人の心に注ぎ給ふものは聖靈にして此の德は已に述べし如く他の諸德に勝り吾人をして天主の無限き完善きに對し萬事に超へて即ち現世の凡百の財寶よりも一層深く天主を愛せしむるものなり。

嘗て或人基督に向ひ多くの訓誡のうちにて第一に守るべきもの且つ尤も大なるものは何なるかと問ひたるに基督答へて『爾の心を盡し力を盡して天主を愛すべし。之れ第一の訓誡なり、第二の訓誡も亦之に類す汝は天主の愛の爲に他人をも我身の如く愛すべし』と宣へり。

天主は限りなく善にして又限りなく愛すべきものなるのみならず、尚ほ限りなく完全きものにして吾人に多くの恩惠を下し給ひしものなれば、吾人に向て態々天主を愛せはと命じ給はずとも吾人は當然之を愛す可きが如きも、天主はよく吾人の弱點を知り吾人が稍もすれば五官に觸るゝものゝみを考へて目に見えざるものを閑却せんとする傾

向あることを知り給へば吾人が或は其の創造主を忘れ、日々の恩人を忘れ更に又其救主を忘れて有形物に執着し之れに依りて幸福を求めんとして却つて眞正の福樂を失ふに至るべきことを洞察し給へたれば殊更に吾人に向ひ汝心を盡し萬事に超へて主なる汝の天主を愛すべしと命じ給ひしなり。

天主を愛するにも勿論段々の差はあり然れども被造物の力にてなし得る程度に於て最も完全に之れを愛したるものは多くの被造物に在りて唯聖母マリヤあるのみと言ふも過言にあらず。マリヤが天主を愛せし度は之を諸天使諸聖人の愛を總て合一したるよりも尚ほ大なり。

天主は人に命ずるに心を盡し力を盡して愛すべきことを以てし給ひしが聖トマスは言ふ『人が此の訓誡を實地に行ひ得るは現世を去り天國に入りてより後のこと也』と然れども他の聖人は言ふ『天主が現世に於て何人も完全に實行し得ざる如き敎訓を下し給ふ如きことあるべからず、天主は之を完全に行はしむる爲めにマリヤを撰み給ひしなり』と。天主に對する愛は其無限の完全に就いて知る所多きに從ひ益々深厚を加ふるものなるが世に聖母マリヤ程充分に此の智識を有せしものあらざるなり。マリヤは其の母の胎内に宿られ給ひし時より聖靈の光明にて充たされて天主極めて勝れたるものなること、愛するの價値ある唯一のものなることを明瞭に見るを得たるが故に深く之れを愛したりき。マリヤの靈魂はいたく天主の偉大なること、美麗なること、善良なることにより動かされたれば天主以外の物は何物をも愛せんとの考へ起らざる程なりし、彼女は被造物に就いて其善美にして愛すべき所は委く之れを天主より受け之れを造物主の絶對に完全なるに比すれば原子の微にだも及ばざるを知れば彼女の心は常に天主の方に向ひ固く之れに愛着して何物をも之れを離すこと能はざる程なりき、マリヤは絶えず天主の完全なることを眺め瞬時たりとも祈禱愛慕の行爲を欠きしことおらざれば其情は益々增行くのみなりき、天主を愛すると云ふことは

結局彼れに就いて考ふることにて人が天主を愛すること深ければ深き程天主の事を思ふこと多く天主を思ふこと多ければ多き程又之れを愛すること大なり、聖マリヤは如何に天主が愛すべきものなるかを知り居たれば彼の外には思を向くる價値あるものを有せず日夜天主の事をのみ思ひ續けたりき。マリヤが見る處のものは凡て彼女に天主の紀念を想ひ起さしめ天國の莊麗は彼女に天主の勢力と其無邊廣大なることを認めしめ、花を見ては天主の美を認め、果實を見ては其の慈愛を認め、山は其の偉大を思はしめ、此世の出來事は其の攝理の玄妙を悟らしめ、又人類を見ては天主の子なりと信じたり。

天主を愛するとは天主に就て自ら樂しむ事なり即ちマリヤは天主を讃美し禮拜し、之れに感謝し、之れに祈ることを以て言ふべからざる快樂、幸福なりとし天主の聖名が世に知られ愛され、尊敬さるゝことを熱心に望めり。彼女は天主に對する人類の忘恩を嘆き天主に反きてなしたる無類の罪科を見ては自己が禮拜、愛慕の勤行を倍加して彼等の爲めにその罪科を贖はんと務む。

愛とは其愛するものゝ爲めに働くことを云ふ、故にマリヤがなせし總ての行爲は悉く天主の爲めにして彼を喜ばしめんとの心掛の外には何等の望みもあらざりき。

マリヤは愛情の深淺は其所爲の如何によりて知ることを

得るものなるを知れば、聖ポーロが基督教徒に向て『人は飲むも食も其外何事をなす時にも總て天主の光榮の爲めに之をなすべし』と云ひし所を尤も完全に實行ひたり。最後に愛とは又己れが愛する所の者と、思想、慾望、行動を共同意致せしむるを云ふ。即ち愛者と同一の意思を有するを云ふ故にマリヤは自己の意思が天主の意思と同樣なることを努め如何に苦しき境遇に在りても例へば聖子の死に際しても凡て天主の求め給ふ所に同意し、聖子の如く常は天主に向て『己が意思は如何にてもなれ我は偏ら御意の行はれんことを望む』と言ひたりき。故にマリヤこそ眞實に心を盡くして天主のみを愛したり。

さ謂ひ得可きものなるが彼女が又凡て天主の愛する所のものを愛せしはかくする事が能く聖意に協ふを知ればなり。かゝればマリヤは天主を愛する事に於て常人に勝りたるが如く他人を愛することに於ても比類なかりき。他人に對する愛は愛德の他の一枝にして、之れなくしては天主に對する愛も存在することを得ず両者相俟ちて初めて其全きをなすものにて一を滅するものは自然他のものをも滅ずに至る。故に天主を眞正に愛せんと欲せば又必ず他人をも愛せざるべからず。之れ彼等は天主に造られたるもの、天主の子、天主の殿堂をも云ふべき基督の血に依りて贖はれ天國に於て永遠に天主と共に生活し得べきものなれ

ばなり。

吾人に天主を愛すべきことを命じ給ひし天主は又等しく我身の如く他人をも愛すべきことを命じ給へり。基督宣く『我れ汝等に一の新しき敎訓を與へん、そは我が汝等を愛せし如く汝等相互に愛すべく人は之れを見て我弟子たるを知らん』と。

何人も聖母の他人に對する深き愛德を充分に言ひ表すを得ざる可く基督の言に『愛の尤も大なる徵は友人の爲に生命を捐つることなり』とあるが基督自らは實行し給ひしも、マリヤは一見したる所にてはかく迄熱き愛を有せざりしかと思はるれどさにあらず、マリヤが愛の爲めに其の生命を捐てざりしは決して自から是を惜みしが爲にはあらで天主が之れを欲し給はざりしが故なり。かくマリヤは愛の爲めに命を棄てざりしと雖もそれよりも猶ほ辛き犧牲をなしたり即ち彼女は己れ自らよりも更に深く愛せし聖子の生命を愛の爲めに献げたればなり。

愛は犧牲に依りて證せらるゝものとせず、マリヤが吾人のために成せし犧牲は人の母がなし得る最も大なるものなりき。彼女は基督の母となることを承諾せしと同時に吾人のためにその愛子が殺さるべきことをも承諾したるにて一生の間特に十字架の下にありて甚だ屢此犧牲を新にしたり、人は嘗て基督が御父なる天主に就いて云ひし處を

リヤに就いても云ふを得べし即ちマリヤは此世の人を深く愛せしが故に其愛子をも與へて惜まざりき。聖子の御苦難の間、マリヤが受けし悲哀は死に勝る程辛かりしものにしてマリヤが死せざりしは全く一の奇蹟とも云ふべきなり。

マリヤは此世に於て最も愛し最も惜みし所のものを吾人に與へ吾人の救靈の爲めに自らをなきものとしたり。マリヤが吾人の救靈の爲めになしたりし祈禱は如何に熱心のものなりしよ。又之れが爲めに彼女は如何程勤勞し節慾し如何に多く罪の購贖の業を自らなしたるべきか、抑亦吾人をして天國に達せしめんが爲に如何に多くの憂苦を忍ばれしか、是等のことを思ふときはマリヤが常人に超えて尤も盛に他人に對する愛德を實行したる事を知る可し。

加之愛とは聖ポーロの云ひし如く勘忍強く慈悲に富み、嫉妬、陰險、驕慢等を含まず憤る事なく他人を害せんなどの考へを起さずして何事をも忍ぶことを要するものなるが如斯き性格は實にマリヤの性質を其まゝ寫したるが如き者なり。

マリヤが從姉妹エリザベットを訪ひたる時或は彼女がカナの婚儀の際に於ける操行などは是れが適例なりと云ふ可し。

偖吾人にして眞實にマリヤの奴僕たらんと欲せば宜しく

先づ其の愛德を學ばざるべからず。即ち彼女の如く天主を心の底より愛すべきものなるが之れが爲めに何れよりも先づ努めて罪科を避くる樣に心掛くべし、我主嘗て曰く『汝若し我を愛するならば我敎訓を守るべし』と罪科は天主に對する愛とは氷炭相容れざるものなれば愛を口にしながら罪を犯すものは虛言家なり。只かの天主を愛せんことを欲する人によりては其意思の薄弱なる爲めに往々心にあらず罪を犯すことあれどかゝる時は直に後悔の情を表はし赦免を乞ふことを怠る可からず。又小罪なりとも知りて之れを犯すは眞に心を盡して天主を愛せざるの徵なり。

吾人はマリヤがなせし如く常に屢天主の事を思ひ其聖意を喜ばしむることは何事にても進んで之れをなすべく、天主の聖意に全く服從するは最もよく天主を愛するの確說なりと云ふを得可し。

吾人は又天主の御望に從ひ他人をも愛すること肝要なるが之れが爲には聖母が充分に行ひたる諸の善德を實行ふべく或は少なく共之れを實行するの心掛なかるべからず。即ち、謙遜、溫和、忍耐、を守り、他人をも亦吾人と同じく天主の子なるのみならず或は吾人よりも更に深く天主に愛せらるゝものなるやも知れず又他人が多少の欠點を有するも己れの欠點は或は之れより大なるやも知れず彼等も亦吾

第七章　マリヤの愛德

人の如く赦宥を望むものなること、又吾人が彼等になす處の事を他人が吾人になすときは甚だ喜ばざるものあることなどを考へ見る可し。

吾人が他人に對して讒謗、罵詈、邪推、嘲弄等を加へ又彼等が我等に對してなしたる過失を恕すとなき時は我身の如く他人を愛すると言ひ得ざるなり、聖母はナザレットに在て暮しを立て家事に從ひしも他の家婦の如く隣家に行きて近所合壁の風評をなすなどのことなく未だ嘗て他人の言行などに就いて自ら語りしこともなければ他人が語りし所を聞きしこともなかりき。故にマリヤに倣はんと欲せば宜しく凡て上の如き行を止め專ら他人の爲め朋友、

怨敵の爲めにも祈りて天主が萬人の上に憐愍を垂れ天國に入るを得せしめ給はんことを乞ふべきなり。

嗚呼聖なる童貞よ、我をして心を盡して天主を愛するの聖寵を得せしめ給へ我れが天主と他人の愛との中にありて死するを得んが爲に凡ての罪科より我れを守護し給へ。

第八章　瑪利亞の用心

一般に用心と云ふは己れが期する目的に達せんが爲めに適當なる處置を取ることを云ふものなるが之に數種の區別あり先づ其目的の如何を問はず不正の方法を以て之を得んとするが如きは之を惡しき用心と云ふべく、又よし正直なる方法手段を用ふるとも只現世の力に依賴するのみ

にして其求むる所の目的も亦自然的のもの即ち現世に關するものに過ぎざるときは是を自然的用心と云ふ例へば商業、勞働、勉學等に依りて財産を增し名譽を得んとするが如き之れなり。

茲に主として論ずるは基督教徒の用心と云ふものにして救靈を得、天國に達するが爲めに尤も必要なる處置を取ることなり。

聖トマアキノの言に依れば基督教徒の用心とは最も適當なる方法を以て吾人を善に導き且つ吾人が爲す可き所のものの避くべき所のものを最も明瞭に知るを得る善德なりと、以て此德の如何に必要なるかを知るべきなり。

此の德は水先案内者の如く凡て吾人の行爲の計畫に付いて後日自らなしたる所に就いて悔ゆることなき樣吾人を指導くものにして燈明臺の如く荒れたる海中に在りて吾人をして暗礁の危險を免れしめ安全の港に達せしむるものなり。或日五六人の修道者等大聖人アントニオの身邊に集りて修道者が最も完全なる域に達する爲めに如何なる德が必要なるべきかと云ふことを論議したりけるが各其意見を異にせる爲め會議は何日果つ可くも見えざりき。かゝれば聖アントニオは終りに立ちて『我が親愛なる兄弟よ、汝等の言ふ所悉く語れり、基督教徒が第一に守るべき德は用心の德なり、斯の德は嘗て基督の宣ひし如く光輝ある眼

にして全身を照らし吾人に善く生活し善く死する方法を教ふるものなり』と云ひたりき。

聖アントニオの此の説は全然聖靈の教ふ所と一致す、彼は『用心は聖人の學問なり』と云ひしが此の德は實際現世に於て最も有益なるものゝ一にして思慮用心深き人は實に幸福なりと謂ざるべからず、然れども眞實に此の用心の德を得んと欲するに就いて守るべき種々の事あり、先づ人生の目的は天主の定め給ひし説に從ひ之を實行ひて以て天國に入る事にあるを確信することを要す次には各自其身分に應じて救靈に必要なる手段を撰むべく第三には是等の手段方法を實行す可し。而して此の用心の德を得るには凡

そ下の如き五つの事必要なり。

第一熟考　熟考を用ひずして用心家ならんとするは恰も木に樣りて魚を求むるが如きのみ、故に吾人は過去の事を熟考し現在己がある境遇に就いて考へ又將來の事に思を起すべし、其他或は何時來るやも計られざる危難、前途に遭遇すべき障碍などの事をも熟考し置く可きなり。

第二讀書　聖書と聖人傳の如き善良なる書を讀むことを怠るべからず、聖人の傳記は甚だ稗益あるものにして吾人をして親戚、朋友、世人、魔鬼等外面より來る障害及び情慾、誘惑等内部より來る障礙に打ち勝つ方法を知らしめ罪に陷るの機會を避くるの方法を知らしむ。

第三用心深き人　道徳堅固なる人、長上等の意見を聞くこと、自分の力のみに依頼して自らよしとするものは不幸なるものにして屢錯誤に陥るを免れず、之に反し謙遜にして他の意見を聞くを厭はざるものは天の祝福の降ること疑を容れず。

第四七情を抑る事　驕慢、華奢、貪慾、猜忌、等の情ほど吾人の理性の光明を曇らすものはなし、人若し是等の情の唯一つによりてのみ支配さるゝ間なりとも既に健全なる判斷を下す能はざるなり。

第五祈禱　就中祈禱は尤も之を怠るべからず、熱心にして質朴なる祈禱により天主の聖寵を惹くの力あり、吾人は盲目、無能、孤弱にして心の移り易きものなるが天主は之に反し光明、智慮の力を有するものなれば之に依頼する者には惡を辨別るの方法と之れを避くるの力とを與へらるべく、天主は爲すべきこと爲すべからざることを吾人に教へ給ふ、上に質朴なる祈禱と云ふことを述べたるが、人が實際善き祈禱をなす爲め必ず之は天主の扶助を俟たざるべからざるなり。

偖吾人眼を聖母の上に注ぐ時は吾人が之を呼んで『最も用心深き聖母』と云ふの甚だ至當なることを知るべし、實際マリヤは幼少の頃より此の用心深き德を得又は之を保つ爲めの手段方法を實行することを怠らざりき。彼女がゼルザ

レムの聖殿附屬の學校に他の少女等と共に在りし間、彼女は日々默想し且つ聖書を讀んで其研究に力を盡したり。彼が常にその長上の命のまゝに從ふ事例へば聖ヨゼフとの結婚の際に於けるが如くなるが之れ天主の意志に反くことを恐れて大司祭が彼女に求むる所を拒むことを欲せざるが故なり、其他マリヤは天主を祈り其心は常に天主に結び着きて忙はしき仕事をなせる間とても尚ほ且つ天主に語ることを防げざりき。かくの如くにしてマリヤは其幼時の有樣を一生の間變ふることなかりき、之れ彼女の一生の目的は天主に仕へ之と共に住み萬事に於て是に忠實を盡すにありたるを以てなり。

吾人はマリヤの傳記中彼女が用心深かゝりし一の美はしき例を見る。そは彼女が大天使ガブリエルに對する時の行爲なり。即ち大天使がマリヤに天主の母に撰まれたることを告ぐるや彼女はその甚だ大切なる且つ幸福なる報知なることを知れりと雖も用心深き聖母は此名譽、此の尊位に付いて心を眩惑さるゝことなかりき。

元來彼女は童貞にして常に之を守るべき誓をなしたるが故に今や天主の母となるべしと云ふ言を聞きては之れに承諾を與ふるに先ち委細の事を聞まほしく思ひたるなり。而して大天使より彼がよし天主の母となるとも其童貞を破る恐れなきことを聞くに及んで初めて此の大なる名譽

を拜受したるなりき。嗚呼いとも要心深くいとも純潔なる童貞、爾が誓約ならんと欲して意を用ゆること深きを見そなはして天主は如何に爾を愛するの念を增し給ひしぞや。茲に一つ注意すべきは吾等マリヤに祈願するに當り之を『最も要心深き童貞』と呼びて母と呼ばざることなり、之れマリヤが童貞を守らんが爲めに取りし用心を讃美し凡て純潔清淨を保たんとする人々特に青年男女の摸範となさんが爲めにかく呼ぶに至りしなり、人は青年を以て不注意にして用心足らざるものなりと云ふ之れ青年は世の經驗に乏しく又心慮不充分なるを常とすれば自己が愛する爲めの結果の如何及び自から瀕める危險に就いて何等知る所

なく、又災を避くるに必要なる手段を取らざるを以てなり、故に自己の清淨純潔を保たんと欲する青年處女はマリヤが常に天主に忠實なるが爲めに取りし用心注意を鑑とす可し、玄かして之が爲めに青年等は先づ第一に其の唯一の目的たる天國の福樂を受けんが爲めに靈魂を助くることの絶對に必要なるを確信じ両親及び常に告解する靈父の意見を守り處世の目的を定むるとか其他重大なる意見に際して常に彼等の意見を能く聽くこと怠る可からず。其他祈禱を除きては何事も無益となるものなれば努めて之をなすべきは云ふを俟たず。

人若し用心深き時には多くの罪科を避くることを得可し、

世には俗界の事物に就いて甚はだ用心深く例へば商業の爲めとか健康を維持つ爲めとかには非常に細密なる注意を拂ふ人は甚だ乏しからざれども眞の用心の德を有するもの何事よりも天國を求め又は罪を避け聖寵を保つ爲めに及ぶ丈け注意を加ふるもの極めて稀なり、嗚呼只一片の注意を欠きしが爲めに過失を來たし名聲を失墜さしめたるもの甚だ多きに非らずや、かの只現世の事のみに追れ死後には惡者は罪せられ善者は賞せらるゝ他の世界の有無をも知らんことを欲せず、無意味に生活せるものは不用心の至りなるべく、又かの靈魂の不滅來世の存在等知りつゝも己が靈魂を救はんが爲めに必要なる行爲をなさず、此の如きは死際に至りて之を考ふれば可なりなど思へるものも又不用心の極みにして情慾、憎惡の念などにより惡魔の勸誘に從ひ敎會を攻擊し己が親戚朋友等をして宗敎上の勤行より僞路に誘ひ尙ほ善人を迫害するものは不用心も亦甚だしと云ふべし、若し夫れ勇氣に乏しき基督敎徒が其の良心の勸めに反きて祈禱を怠り秘蹟を受けず己れの欠點を改め情慾を抑る爲に力を盡さゝるのみか進んで俗世の不義の快樂を求めて之れに耽り醜惡なる或は危險なる機會を喜び惡むべき恥べき關係を作るなどはその不用心を見るも戰慄く程なり。

吾人は注意して彼等の伴侶に入るを避け聖母に摸倣ひ天

主に依頼して惡友、惡書、惡會等之を要するに何事をも吾人を罪惡に誘ふものを避け吾人が臨終の際に於ける力ある審判者の口より『用心深く忠實なりし僕よ、汝が主の喜の中に入れ』との語を聞き得る樣努むべきなり。

嗚呼至て用心深き童貞よ、我等をして此の德の重要なることを悟らしめ給へ爾は我等の母にして我等は自ら危險に身を置きて之を覺らざる小兒の如き者なり、願はくは我等を守護し我等をして我等の前に横はれる絶壁に陷らしむることなく我等を助けて輕卒不注意を癒せしめ給へ。

第九章　瑪利亞の服從

服從の德とは其形式の如何を問はず凡て長上の命令に迅速に從ひ超性的の動機にはじて之を實行せしむるの德なり。此德が必要にして且つ甚だ美なりと云ふ理由は是長上に從ふことはやがて天主に從ふに同じければなり。即ち凡て正當なる長上は其權力を天主より得たるものなれば長者に從ふは是全く長上が代表する天主に服從するにあらずして自ら卑しくなりたるにあらず。命令するの權利及び服從するの義務は啻に正當なる權力の關係より生じ來るのみならず尙ほ天の法則に適へるか或は少なく共天主が否認せざる如き命令法律なることを要す。故に其の命令が天主の掟に反せるものなる時は人は之れに從ふを要せざるのみか之れに從ふを得ざるなり。

服從とは善良にして正當なる事に關して己れの意思を長上の意思の下に屈服はしめ又此の長上の意思の前には己れを全く無き者とすること肝要にて從ふて服從は長上に對し己が忠順を示す尤も有力なる證據となるなり。

天主は嘗て吾人の祖アダムの忠順服從を試みんとして之れを或命令に從はしめたるにアダムは之れを欲せざりければ即ち天惠を受くるに足らざるものなりとて樂園より放逐たりき。此の最初の人間に不從順の結果たる諸惡を癒す爲めに天主は救主耶蘇に向て完全き服從を求められたり、此の基督の服從はアダムの場合に於けるよりは更らに困難なりき、之れアダムの場合には只或る果實を喰ふ可からずと云ふに止まりしも基督の場合は之れと異り、非常なる苦難を受けたる後其生命を捐つ可しと云ふ如き命令なりければなり。基督に就て嘗て謂はれたることあり、「彼れは死に至る迄十字架上に命を捐つるに至る迄從順なる可し敵に天主は彼れに與ふるに凡ての名より勝れたる名を以てし給へり」と。

服從は社會の秩序の基礎支柱にして若し命令するの權利服從するの義務を廢するときは人は社會に於て生存することを能はざらん。故に服從は社會各階級の人に向て必要なるものなり。俗社會に於ても宗教界に於ても家族にありてもはた一個人に於ても服從ありて初めて秩序を保ち平和

を享有することを得可きのみ。若し之れなからんか革命の擾亂、凶變、衰亡等繼で起る可く、服從は又肉身上、靈魂上の恩惠、聖寵、現世未來に於ける名譽、光榮、福樂の源泉なり。

聖母マリヤは服從の德に就ても亦他の諸德の如く尤も完全く之れを實行せられたり、吾人は常にマリヤに倣はんと欲するものなれば彼女が其の兩親、後見人モイゼの法律、聖配、其他政府等一言に云へば一生涯のあらゆる境遇に於て如何に服從の好模範を吾人に示めされたるかを見るに有益なる事ある可し。

マリヤは極めて幼なき頃より兩親によく從ひたるが此の服從は世の常の子兒の如く本能的に自覺なくして存するものとは異なりマリヤは幼にして理性の作用を有し自ら爲す所の何事なるかを知り居たり即ち兩親が天主に對してなしたる誓の旨に從ひマリヤを奉獻する爲めに聖殿に連れ行きたるとき彼女は歡喜を以て兩親の意思に服したり、又其後聖殿の附屬の學校に在りて同じ年配の少女等と業を學ぶ時に當りても極めて嚴格に其規則を守り長上の訓誨に從ひたりしかば其信神、從順、勉强なるを見て同輩長上の人々はいたく感嘆したりしと言ひ傳ふ。

幼にして彼女は兩親を失ひ後見人に從ひしが嘗て童貞の誓を立て一身を天主に獻げたるもの故後日後見人がマリヤに向て婚姻を勸めしときはマリヤは一方にて其誓を守

り度く又他の方にては後見人の命に從ひたくもあり二者の間に挿まりて如何にせばよからんと心を苦しめたりき。然れども天主は彼女の祈願を聽きマリヤは聖靈に導かれて童貞を守るの意思を保乍ら後見人の言の意に從ひたりしが其後暫らくして大天使ガブリエル來り天主が彼女を以て御母と撰み給ひしことを告げしとき彼女は快く之に從ひ大命の如く我になれかしと答へたり。九ケ月の後もはや產期に近きたる頃に至りローマ皇帝の命とありて三日程の旅行をなしてベトレエムに行くを要せしが彼女は其苦痛を忍びて之れに服從したり。基督降世後四十日目にマリヤは潔の式を受くる爲め且つ聖子を天主に奉獻する爲めにゼルザレムに赴きたり、元來マリヤは出產の爲めに些かの穢をも受けしことなければ此のモイゼの法律に從はざるも可なりしなり。然れどもマリヤは何人も法律の規定を免るゝを得ず又世間の人々より見れば己れも亦普通の一女子に過ぎざればやはり此の法律に從ふべきものなりと思はるべければ之れに從はざるは惡しき例を示すに當る可しとて自分進んで之れに從ひ世人が己れは特別に尊き身分のものなるを知られざることを少しも遺憾とはせざりき。

マリヤは亦聖配ヨゼフに服從の好摸範を示したり。一日夢の中に天使ヨゼフに顯はれて聖子及びマリヤを伴ひ直ち

に埃及に逃る可きことを告げたるヨゼフは醒めて後此の事をマリヤに告げたるに彼女は何故に天使が己れに告げずして却つてヨゼフに告げたるかを尋ぬることなく、聖配が直ちに出發せんと云ふがまゝに早速之に同意して埃及に赴きしがその歸途に於ても亦同樣なりき。

其他マリヤの一生は常にかくの如く從順にして充されたるが聖子死するに臨みマリヤを聖ヨハネに托じたりしかば彼女は其の餘命を彼と共に送りヨハネの赴く所へは何處なりとも伴ひ行きたり。故に吾人が基督に就て云ひし如くマリヤに就ても亦彼女は死に至る迄從順なりきと云ふを得可し、彼女は從順の德が如何に必要なるかを知り基督

と共に斯德の完全き龜鑑とならざる可からざりしなり。服從をなす爲めには吾人が尤も愛惜する所のもの即ち吾人の意思を犧牲とせざる可からざれば往々甚はだ行ひ難きものあり、近來世間に流布れる虛僞の自由獨立の精神は不識不知の間に吾人をして服從の德より遠からしむ又かの最初の婦人をして不從順ならしめたるの魔鬼は服從なきときは世の中は只混亂不幸に陷る可きことを能く知るが故に常に人を誘ひて從順ならしめざる樣に努め之れが爲めには盛に僞言を吐きて人類は決して服從を甘んず可きものにあらずなどゝ信ぜしめんとせり。故に吾人は注意して是等の甘言に欺かれざる樣にし服從なき結果の如何に

恐る可きものなるかを考ふ可く常に自らの心に向て下の如く言ふ可きなり『天主の聖子にてさへ我等を救はんが爲めには死に至る迄天意に服從し給ひたるに塵芥に等しき罪人なる我は如何にして服從せざる事を得可きか凡ての被造物の中に在りて最も完全にして罪無く天主及び吾人の母たるマリヤが立派なる服從の摸範を遺されたるを見ては卑しき我如何にして服從を欲せざるを得可き』。

故に吾人は先づ天主及び敎會の訓誡に服從し日曜の安息大齋小齋の掟を守るは勿論何人も皆己が肉躰靈魂の長上を有するものなれば皆なる服從する義務を有するものなり、されど吾人の服從はかの奴隷が主人に從ふが如き壓制的の服從なる可からずして心より好んで服從す可く又俗世の兎角の理由に基くにあらずして吾人は天主の意思に服するもの全く天主の爲めに服從するものとの考へにて我主に愛と忠義の赤心を示すが爲めに服從すること肝要にて己に與へられたる命令中には天主の意思の含まれあるものなることを考ふ可きなり、人はマリヤがなせしが如く其兩親に從順なる可きは天主の命じ給ひし所にして從順なる小兒は天の祝福を受くるを得るのみならず、又世の人々より愛せらる可し。

聖ペトロは婦人は恰も基督に從ふが如く其夫に服從す可しと宣じが此の點にても聖母を摸範とする婦人はよく一

家を平和の中に樂しましむることを得可し、又婢僕は如何なる境遇の下にあるも常に彼等の主人に服從す可く臣民は君主に服從す可し之れ天主の命じ給ふ所なればなり。若し服從の義務ある者が各よく是を守りたるときは至る所秩序、平和、靜穩の遍きを見るを得ん。

嗚呼服從の尤も完全なる鑑なるマリヤよ爾は天主の命令に悉く服從ありしことに依りて天主の聖心を喜ばせ奉れり。願はくは我をして虛僞なる獨立の精神を抑壓することを得せしめ給へ、我は我が心に吐ふ如き命令には喜で服服すれども些かなりとも我に不自由の感を起さしめ或は犧牲の恥辱、苦業を要する如き命令に對しては常に不平を漏らさゞることなかりき。我は從來我が意の儘に行ひ來りしが今日以後は心を改めて爾の龜鑑に倣ひ天主及び敎會に服從して其誡を守り又天主の爲めに肉身上靈魂上の命令に從ひ天主が從順なるものに與へ給ふ賞賜を汝の如く我も受くるを得るに至らんことを望む。

第十章　マリヤ利亞の貧窮に甘んずる德

貧窮の德とは超性的の理由により現世の財貨に執着せず之を棄て顧みざるの德なり、かく世の財寶より解脫するときは人は浮世の富を得ざるも些か怨むことなく不正なる方法にて之を得んとの念をも起さゞるべく、救靈のことを忘れて專ら世の富貴を以て目的とする如き淺間敷考へを

抱き是を以て樂みとなす如きこともなく、金錢を有益なる途に使用するに至る可し。

實際は貧者なれども此の貧窮の德を有せざる者あり、例へば富者を嫉み富貴を得んが爲めには正義を蹂躙るも意とせざるもの、己が困窮なるを度外に悲しむもの、之れが爲めに短氣となり憤怒の情を擅にするもの、如き皆な此の類なり、之れに反し身は如何に富めるも尚ほ心に貧窮の德を有することを得べし、例へば巨萬の富を有して、しかも之れに執着せざるもの、天主の爲め又自己の救靈の爲めに必要とあらば何時にても之を捨つるを惜まざるもの等は皆な之なり。

世に此の貧窮の德を守るものは甚だ少し、實際貧困なる人にして自分此の窮乏を喜び之れに滿足する如きものは寥寥として曉の星の少なきが如く、特に富者にありては多くは皆な之れに執着して若し其全部或は一部を失ふ如きことあるとき大に悲み傷まざるものは數ふる程もあらざる可く之れを失はざる爲めには罪科をも犯すことを怖れざるもの多し、彼等の爲めには富を得んとの配慮最も盛にして日夜此の事のみを考へ是を實現せん爲めには其の方法などは撰ぶ所にあらずして如何なる出來事如何なる關係如何なる境遇をも辭せざるなり、黃金の色は常に人の目を惑はしたるが實利主義盛なる今日に於て黃金の力極めて

大にして正直、正義、名譽なども皆な金を以て左右するを得可し。

基督が屢々其使徒を戒めて富を所有せざる樣にせられしは全く之れが爲めにして彼が山上の大訓に於て先づ貧窮を祝して精神の貧しきものは幸福なる哉と云ひ富者を咀ひ彼等が天國に入ることは恰も不能なりと迄云はれたり、

基督はかの惡しき富者の比喩を以て富貴の危險なることを示し屢々之を繰返へし給ひしが特に自らの例に倣ひ貧窮を愛し富貴を輕んず可きことを敎へ給ひたり。基督は厩の中に生れ其の臥もしたる馬槽すら自己の所有物にはあらざり、又卅餘年間の隱れたる生活の間は自ら兩親を助け

勞働して生計を助け世に敎を說く頃に至りては專ら世人の施與に依りて命を繼ぎたり。去かのみならず彼は住ばんに家なく、枕とす可き石塊をさへ有せざりき。彼れが死するや裸躰のまゝにて十字架に架けられ其衣服は人の奪ふ所となり、自己の所有にあらざる墓穴中に葬られたり、嗚呼全能の力を有し萬物の主宰として一擧手一投足の勞を以て身に世界の富と榮華を集め得可き神の子が自ら好んで極めて貧しき生活をなし給ひしを見れば貧窮なるものは如何に貴重にして愛す可きものなるぞや。

基督は自ら貧窮の德を實行せしのみならず又其母をして是を行はしめ給へり、即ちマリヤは恰も耶蘇の如く生れし

時より死に至る迄窮乏に耐へ之れに甘んじたゆき、故に吾人は基督に向つて云ふ如く又マリヤに就て彼女は富めるにも拘はらず能く貧窮なる暮をなしたりと云ふ事を得可きなり。實際マリヤの兩親は富めるものにて彼女は一人娘なりしかばその遺産を繼承することを得可かりしなり。聖マアキム及び聖アンナは共に土地山林及び多數の羊群を有しヨアキムはナザレットに及びゼルザレムに於て各一家屋を有しアンナもナザレットに一の遺産を有したりしが口碑に依れば彼等は其財産を三分し一は之を聖殿に寄附し一は之を貧者に施與し而して殘りの一部を以て生活資料に充てたりと云ふ、故にマリヤは凡て是等の財産を受け

有つことを得たりしなり。然れどもマリヤは全く天主に結び着かんが爲めに是等の財寶を見捨てゝ顧みず兩親の死後其の遺産は國の法律に從ひて之を最も近き親戚に與へ只小さやかなる家のみを己れに取りたるも之れさへ只其使用の權を有するを以て滿足したり、聖母自ら聖ブリジッタに語りし所に由れば彼女は極めて幼少のときに既に何物をも所有せざる可しとの誓をなしたるなり。

マリヤが貧窮なる生活の狀態は啻に甘んじて之を受けたるに止まらず又前例なき所にして從來何人も未だ嘗て彼女の如く絶對的に浮世の財寶を見棄てたるものはあらざりき、古來哲學者と云はるゝ人は皆な富を所有することを

以て道德の途に入るの障礙なりと說きたれども彼等は只己れの邪魔となるものゝみを捨てたるに過ぎずしてマリヤが絕對的の窮乏に安んじたるに比ぶれば恰も云ふに足らざるなり、彼女は後日聖子基督が說敎し事柄を先づ實行に上したるものにて基督が弟子等に向ひ汝等若し完全からんことを欲せば汝の財を悉く賣り拂ひて之を貧者に與へ而して後我れに從へと云ひ給ひしことあるが此は既に業にマリヤの實踐せる所なりき。マリヤは衣食住に就ては極めて淸貧に安んじ家具の如きも只必要欠く可からざるものゝみを留めたるのみ、其他福音書に依れば彼れが何事に於ても常に淸貧なりしを見る可し即ち彼女が聖殿より

出で來りしときの甚だ貧しきものゝ粧ひをなし後結婚するに際しても其夫たる者は勞働を以て其日を送るヨゼフの如きものなりき。其他ベトレエムにあるときの貧窮は勿論彼女が潔の式を受くる爲め及び聖子を奉獻する爲めにゼルザレムの聖殿に赴きしときの如きも富者の供物たる小羊を購ふこと能はざれば貧者の如く只二羽の鳩を獻ぐるを以て滿足したり、又彼女が埃及に流されたる間及びナザレットに歸へりてより後の狀態が如何に憐れむ可き者なりしかは玆に云ふも中々愚かなる可し、さらば聖子御昇天の後はマリヤは其の生活の狀態を變へたるかと云ふに決して然らず、尙ほ昔の如く極めて貧しき老年を送りたり、

即ち彼女がガリレヤの説教者聖ヨアヒに托されたるが甚だ貧困の中に死し彼の臨終に當り種々介抱せし二人の婦人に何にか紀念物を與へんと欲せしも只彼女が身に纏ひし三着の衣服の外は何物をも有せざりしと云ふ。

マリヤは上に記せし如く貧窮を愛し之を實行したれば貧困の中に生れたる者に取りては實に好き摸範なり、彼等にして若し基督が自ら貧家に生れ窮乏の中に生活することを欲し又其母が等しく貧困なることを望み給ひしを見れば、よし彼等が地上の富を得る能はざるも是れ決して天は虐待されたるにあらざるを知る可く天主自らさへ其母と共に是等貧者に甚だ類する生活をなし給ひたるなり、此

の貧窮の狀態は彼等をして容易く地上の財寶より解脫し永遠の幸福を求むるを得せしむるを以て是に付き悲しむを要せざるのみか寧ろ之を喜ばざる可からざるなり、錆と蠹蟲とによりては破壞し去らる可き浮世の財寶を積まんと望むなく却つて天國の財寶を得んことを求めよ、天國には錆もなく蠹蟲もなければ財寶の朽壞ることもあるなしとは基督の御言なるが貧しき者は容易く此の言を守ることを得ん、彼等は又天主が最も愛し給ふ所にして且つ地上に於て最も愛せられたるものを已れに與へられたることを忘る可からず、彼等が若し貧困の苦痛不愉快を感ずる時には聖母マリヤも亦嘗て彼等と同樣の苦しみを受け給ひ

しことを想ひ起す可く、此の考はよく彼等をして凡ての苦痛に堪ゆる力を得せしむる可く又現世に於て最も富裕なるものも死後墓に入りては彼等と何等異る所なきものとなり、富貴は却つて善德を行ひ天國に入る爲めの功德を積むを妨げ。又基督及び聖母マリヤの言に依れば眞正の富貴とは天主の爲めに行ひたる多くの善業を指すものなることを想ひ起す可し。又富める者も聖母に倣ひて富貴より解脫することを學ぶ可きなり。基督が山上の訓戒に於て祝福し呪咀ひ給ひし所の貧困富貴等は決して物質的の貧富を指すにあらで基督は眞實に富の有無を問はず只之れに執着するの心を呪ひ給ひ貧窮の精神富より解脫するの心を

祝福し給ひしなり。

聖フランシスコ、サレジヨ曰はく『眞誠の幸福とは足るを知りて之れに滿足するにあり、足ることを知らざる人には何物を與ふるも之を滿足せしむること能はず、吾人若し必要品以外に欲望を有せざれば決して貧しきことある可からざれど之れに反し慾情の求むる所を擅にせんとするときは何年經るとも決して富みたりと思ふことなかる可し、故に僅かの時間と費用とを以て富者となるの秘訣は其慾望を制限し斯の細工をなす時常に木を削り減じて之を作る彫刻師に倣ひかの晳時色彩を添加して其の作品を仕上ぐる畫家の爲に倣ふ可からず。

第十章　マリヤの貧窮に甘んずる德

吾人は宜しく解脱の精神と名けらるゝ此の貧窮の德を大に重んじ貪婪の食を去るを要す。又吾人をしてかの異教の聖賢すら尚ほ之を呪咀ひたる黄金熱に浮かされ或は道德を輕んじて泡沫の如き財寶を先ずることなく進んで眼を天國に向け其處に吾人を待てる無比の財寶に就て考へしめ猶ほ吾人は更に大なる目的の爲めに生れたるものなるを思ひて『人若し其靈魂を失はゞ宇宙を有すとも何かせん』との御主の語を忘る可からず。

嗚呼童貞聖マリヤよかくも賢明にして天主の愛し給へる所を悉く知り給へる爾が現世の財寶を輕じ給ひしを見れば我が汝に及ばざること甚だ遠きを感じて慚愧に堪えず、

願はくば我をして是等浮世の財寶が頼むに足らざるを知り之に執着することの極めて危險なることを知らしめ我が臨終の際是等の物と別るゝを惜む心なく只天主を我物とするの望を起すを得せしめ給へ。

第十一章　瑪利亞が天意に服せしこと

昔或修道院に一人の修道士ありけるが奇蹟を行ふの天惠を得たり、然るに此人の外貌を見るに少しも聖人らしからざれば院長はかゝる者に天主が斯く大なる天惠を與へ給ひしを怪りつゝ一日己が室に此の修道士を呼び問ふて曰く『汝が奇蹟を行ふの權を得たるは何に本くと思ふか』と修道士答へて云ふ『我も亦之を知らず、我は他の兄弟より多く

第十一章　マリヤが天意に服せしこと

大齋其他の節慾をなしたることなく又彼等より永く默想し祈禱せしこともなし、只茲に一言す可きことあり我は困難に遭ふこと尚ほ幸福に逢へるが如くに之を甘じ受け、如何なる事件起るとも少しも騷かず又憂ふることもなく、嘲けらるゝも賞せらるゝも我に於ては一にして爲めに心を動かさるゝことなし』と。院長は再び口を開きて『然し先日我等の敵が我が修道院の倉庫に火を放ち之を燒きたるときも汝は些かも心を動かさゝりしか』と問ひけるに修道士は靜かに『否少しもさることなかりき、我は久しき以前より萬事の注意を天主に任せあれば凡ての出來事は皆な之を天主の賜物として受くるに過ぎず』と言ひければ之を聞きた

る院長は心の中にはたと思ひ當る所ありこの修道士はかく雄氣に天意に服すればこそ天主は之を賞するが爲めに大なる力を與へ給ひしなれとて大に感嘆したりと云ふ。天主の聖意に從ふことは一の善德にして吾人をして凡ての出來事を皆な天主の手より來るものとして等しく之れに服するを得せしむるものなり。聖バジリヨ曰はく『萬事何事も皆天主の聖意より發し御手より來るものなることを知るに至る者及び天主の聖意を以て己が行動の規矩となせる者は聖人と云ふを得可し』と。

我主基督は言語範例を以て斯の德を吾人に敎へ給ひたり、『我が此世に來りしは我が意思を行はんが爲めにあらずし

て天に在す我が父の聖意を行はんが爲めなり』とは主の言にして彼れが橄欖の園に於て非常なる苦難の爲めに死に至らんとせるとき苦しき呼吸の下より叫びて願はくば爾の聖意を行はしめよと云へり。

吾人が天主の聖意に從ふ可しと云ふ理由は天主は萬事の主にして何物も天主の特別の許可なく或は命令によらずんば此世に生ずるものにあらざればなり。基督嘗て曰はく『天主の許可なくしては吾人の頭髪の一條だも拔け落つることなく一羽の雀だも死することなかる可し』と故に天災困苦、疾病、凶事、其他、凡て吾人に災禍を來すものは悉く皆な天主の聖意より出づるものにして天主は是等のものによりて吾人を罰し以て罪を贖はしめ、或は之に由て吾人を試み功德を積むの便りとなさしむ、幸福なる事件も亦同じく天意に出づるものにして天主は之れによりて吾人を慰めまするものなり。其他直接に他人より受くる不幸、損失、無禮、恥辱等も亦皆な天主に許されたるもの天主が欲したる所なることを忘る可からず、凡て上の如き事を皆な人の手より出でたるものとして之に復讐せんと思ふ者は恰も石を投げ付けられたる狗が眞に己れを害せしものは之を投せし人なるを知らずして却つて石を見掛けて走り行き之に嚙み附きて快とするが如きのみ。萬事天主の意より出づるものなるを知る事温順に之に服する者は幸福なり、實際罪

科を除きては何物も天意より出で來るにあらざるはなし。」天意に服することは人が天主を愛するの確なる證據にして不幸なる出來事の中に在りて心の平和と靜穩を味ひ得る唯一の方法なり、人若し自己に關して生ずる凡ての出來事は悉く天主の欲し給へるものにして且つ天主は善き父にして世の父が其の子を愛するよりも一層深く己れを愛するものなれば我が永遠の福樂を享くる爲めに有益ならざることを望み給はざる可きことを知る時は、假令悲嘆の中にありても心は尙ほ平靜を保つことを得ん、しかのみならず何者も天意に反抗し得るものある可からず、天主は其の意の儘に世界を支配し人は如何に不平なるも天の計畫の一部なりとも變更する能はず。かく人は己れの上に落ち來る不平災禍を以て天意に出づるとなし之れに服す可きものなれども又爲し得る限り之れを避くる爲め豫防を怠る可からず、人力にて避け得可き災厄、疾病、凶變等の豫防を等閑にするは之れ宿命說に陷るもの、懶惰の責を免れざるものなり。努めて天意に服するときは人は暫時にして大に聖きものとなることを得可し。故に吾人が聖母マリヤに於て此の德の完全なる龜鑑を見る可きは言ふを俟たざるなり。

マリヤは其の母の胎內に宿られし時より既に聖靈により照らされ天主の欲し給ふがまゝになさんが爲め全然天

主の手に己れを任せたり、マリヤは後に天主が彼女に求む可き犧牲の如何なるものなるか又天主が彼女に受けしめんとし給ひし凡ての困難は如何なるものなる可きか知る所なかりしと雖も既に能く充分に是等の艱難を愛し天より來る所の者は何時にても悉く之を受んと心掛たり、此の心掛は絶へず天主より多くの聖寵を受くるに從ふて益々盛となり、愈々困難を受け犧牲を供す可き時となりては彼女の靈魂が全く天主の手の裡にありし事恰も軟き蠟が細工人の手裡に在るが如かりき、天主は人の靈魂の力に應じて苦痛犧牲を課するものなればマリヤの如く強大なる心力を有するものには、往々非常に大なる犧牲を求めたり。

マリヤが其の兩親を失ひしは彼女が尚ほ聖殿中に在る時なりしが非常なる信神を以て此の犧牲をなしたり、然れども其後彼女は尚ほ更らに辛き苦痛に遇ひたり、即ちマリヤは家の長にして法律に從ひその兩親を相續し又結婚せざる可からざりしが君て天主に對し永久に童貞を守る可き約をなせしかば彼女今や誓を守るの義務と國法に從ふの義務との間に挾まれ進退に當惑したり、されど此の二つの義務の何れにも反くことを欲せずして彼女は熱心に天主に祈願して其の扶助を乞ひ彼女をして天主の聖意の在る所を知らしめんことを願ひしが遂に結婚することにより此二の義務を實行し得可しとの確言を得たれば、長上の

人々によりて、代表されたる天主の聖意に服したり又其後大天使ガブリヤルが來りて救世主の母となさんとする天意を告げし時にも亦之れと同樣の事ありき。

マリヤは羅馬皇帝の勅命の中に天主の聖意を見たればこそ、旅行の困難をも意とせずベトレヱムに赴きしなれ、又彼女がヘロデの迫害を避くる爲め埃及に遁るべしとの命令を受けしとき全然之れに服從せしは實に感嘆すべきことならずや彼女は實際此の場合に於て天主が己をして其初生兒と共に知らぬ外國に逃れしむるよりは更らに簡便なる方法にて其の子を助け得たるべしと言ひ得べかりしなり。勿論彼女は天主が欲するならば奇績を行ひ得べく、又他の方法にて其の子を迫害より免れしめ得たるを知れりと雖も亦天主が態々此の如き困難を受しめしに就ては他の方法にては達し得られざる目的あることをも知るが故に天主の意思の如何なるかを悉しく測ることをせずして此の艱苦を受け、天意を禮拜したり。此の天意とは正義の者を苦しむるの自由を惡人に許しながらも尙ほ前者を賞し後者を罰するの權を留め保てるものなり。

されどマリヤが天主の聖意に服したる最も感嘆すべく最も大なる例は彼女が人類を贖はんが爲めに其の愛子の死を承諾ひたることなり。此の犧牲がマリヤに取り如何に辛きものなりしか到底筆紙の盡くし得る所にあらず、只天主

が欲する事は彼女も亦之を欲しジョブの如く『爾は嘗て之を我に與へ今や我より之を奪ふ。只爾の聖意の如くなれかしと言ひたり。然かも此の言語に依て彼女は人が獻じ得る最大の犧牲を供へたるものにてマリヤは又何人も未だ嘗て天主に示したることなく又將來とても示し得るものあるべからざる程深く其服從の精神と克己の心とを示したり。

かくの如くなればマリヤが聖子基督の昇天後尚ほ獨り此世に生き殘ることをも天主の聖意に出ずるものとして甘んじ承諾せしは少しも怪しむに足らざるなり。之を要するにマリヤの意思は全然天主の意思と合し之れと融合したりと謂ふも過言にあらずして何物もよく之を離す能はずマリヤは天主の欲し給ふ所の外は何事をも欲する能はざりしなり。

於戲、吾人若し聖母に倣ふを得ばその幸福如何に大なる可き、かくして吾人は此世の艱難困苦の中に在りても常に平和靜穩なる精神を有し得可きなり。偖マリヤに倣はんと欲せば先づ第一に天主が吾人をして悲哀の中に在らしめ、或は災厄に遭はしめ給ふは全く吾人の永遠の幸福の爲めなりと云ふ眞理を熟知せざる可からず。

故に天の攝理に就て不平を漏す可からざるは勿論かの『遵主聖範』の著者の如く常に下の如くに謂はん。『嗚呼我が天主

よ、若しかくすることが爾の聖意に叶ふことならばかくの如くあらしめ給へ、主よ爾は最も佳き所のものを知り給へば何事も主の意の如くならしめ給へ、爾の意の欲する所爾が最も佳しと信ずる所に爾の最大の光榮の爲めに我を導き給へ、我が意思をして汝の意思と同じからしめたまへ」。

是等の語はマリヤ其他眞正に天主を愛する人々の言語なり。然れども吾人には屢天意に服すること甚だ容易からざる事あり。從ふて天主の聖意に完全に合致せるもの極めて少なきは蔽ふ可からざる事實なり、此の德も亦一の天賜なれば我等の母にして又天主の母なるマリヤに依りて之を與へられんことを祈る可し。

茲に三人の小兒を持てる父ありて甚だ聖ヨゼフを敬愛し毎年此の大聖人の祝日には最も熱心に特別なる尊敬の念を以て之を祝すを常としたり。然れども一歲恰も此の祝日に當りて忽然其一兒の死去したれば父の落膽は一方ならざりしに其翌年の同じ日に於て更に他の兒を失ひて此の不幸なる父今は全く失望に陷り其最後の一兒をも失はんことを恐れたるに來年のヨゼフ祭には別に之を祝せざることに決し此の祝祭の近づける時數日前より彼れは恐怖の念に驅られ且つ悲嘆の情を忘れんが爲めに旅行を企てたり、偖て彼れが只獨り永き旅路を茫然と思案に暮れて歩みつゝありしに路傍の樹枝に懸りて縊死せる二人の青年

第十一章　マリヤが天意に服せしこと

を認めたるが、其時に天使彼れに顯はれて『汝は此の二人の若者を見たるか汝の二人の子供も若し尚ほ生存しならば必ずかゝる最後を遂ぐべし、汝は聖ヨゼフを愛すること人に越えたればヨゼフは天主に祈りて汝の二兒が幼少き間に死して家名を辱しむる如きことなからしめ又兒等をして安全に天國の福樂を得せしめんことを計りしなりと物語れり。

上の例は死亡、痛苦、不幸等も時としては天の恩惠なることあるを示すものにして吾人は須らく深く天主に信賴し彼れが何時も常に吾人の最上の幸福を望み給へるものなることを信ず可し。

嗚呼我母なる童貞マリヤよ我をして汝に倣ひ天主が我に送り給ふ所のものを悉く喜びて受くるの聖寵を得せしめ、汝の如く永遠に天主を讃美することを得せしめ給へ。

第十二章　瑪利亞の謹愼と沈默

使徒聖ポーロはフヰリッポ人に向ひて『衆人をして爾曹の謹愼なるを知しめよ』と云ひ、又コリント人に贈れる書中に於て『耶蘇基督の溫和、謹愼によりて爾曹に請ふ』と云へり。是等の言葉は謹愼の德が如何に尊重す可きものなるかを示す、謹愼は他の諸德の裝飾となるものにして、或人は之を以て女王の双肩に掛けられたる美はしき外套の如きものなりと云ひ、ある有名なる異教徒も、嘗て『謹愼は神の尤も美

はしき贈物なり』と云ひたり。然らば謹慎とは果して何物をやと云ふに、此は歩き振、言葉遣、笑ひ風、衣服の着こなしなど、一言に云へば凡て人の外部の身拵を整へて以て、禮義に協はしむるの徳にして、思考、慾望を攝制するによりて生ずるものなり。聖アンセルモ曰はく謹慎ある人は饒舌ならず、不注意の言を吐かず、人より他言を禁ぜられたるとき、或は他人を害する如き秘密に就ては、斷じて沈默を守り、愛徳に反する説話に耳を假すことなく、又好奇の眼を左右に向け特に厭ふべき物などを眺むることなし、又謹慎なる人は擅に怒り憤ふるなどのことなく、人より責められ、或は名譽を受くることあるも驕慢に流れずして、飲食を攝し努めて他

人の注目を惹かざる樣心掛くるものなり。

又謹慎深き人は必要ならざるときには、多く人目に觸るゝ所に出でざれども、かゝる人程益々世人の尊敬と愛とを受くるものにて、逸才高徳の人が此の徳を守れるときの如きは特に然りとす。

饒舌せず、大言壯語などを避け、自分に相應じたる質素なる衣服を纒ひ、談笑するに大聲を發し面相を崩すことなく、無衍儀に陥らずして何人に對しても常に溫和、且愛嬌に富める人は自然人の心を動かし、其の同情を惹くに至るものなり。

凡そ人の目に觸るゝ所は主として、外部にあれば外貌の禮

儀に協ひ質素、謹直なるもの程人の心を惹くものあらざるは、經驗上疑ふ可からざるなり。聖フランシスコ、アシジオ一日其の修道士の一人を呼び説教の爲め町に赴かんとて相伴ひて出でしか、二人は町を一週したる後、直ちに修道院に歸へりたりければ、修道士は怪み、聖人に向ひ何故に説教せざりしやと問ひければ、聖人は我れ已に説教したるなりと答へたりと云ふ。實際聖人が其の風彩を以て、町の人々に示したる謹慎、質朴の模範は、尤もよき説教と同一の功あるなり。

又謹慎は只俗世に於てのみ、倘ほ甚だ有益なるものなり、凡そ肉躰、靈魂の間、外貌と内心との間には密接なる關係あるものにて、一方に生ぜしことは必ず直ちに他方に表はれ、精神が健全なるときは身躰も亦健全にして、之れに反して五官の作用其常規を逸するときは、精神も亦此れに類し、遂に墮落の淵に陷るに至る。聖イエロニモは人の面は心の鏡にして、默して言はざる眼は、能く心の秘密を漏らすものなりと云ひ、又聖書には外貌を見て其人の心を察し、近く之れを見て以て、其の用心深きや否やを知ることを得可し、人の性質は其服裝、擧動などによりて知るを得可しとあり。人若し謹慎深き時は、罪の入る可き間隙なきを以て、多くの罪を避くることを得可し。聖博士等は五官は身躰の窓戸にして塵埃が窓戸より入り來る如く罪科及び誘惑は大抵五官より又

り來るものなりと云へり、故に人若し多く罪に陷ることを免れんとせば、深く謹慎を守り、耳、目、口、舌の慾を妄りにす可からず、然らずんば精神は多少惡しき空想に耽り、遂には罪を犯すにも至る可し、又よし罪に陷るまでには至らざるも少くとも祈禱をなすの防げとなり、默想を厭ふに至る可きは必定なり。

吾人が此德の龜鑑となすべきもの、我主基督を除きては勿論聖母の如きものある可からず、吾人若し聖母マリヤを眼前に浮ぶる時、彼女の姿は必らずや尤も完全なる謹慎を以て飾られたる外貌を有するなる可し。マリヤは恰かも其潔白なる靈魂を怖るゝものゝ如く、五官を戒めて放縱ならしめざりしなり。彼女の風彩は殆ど天使の如く、其の態度は謙讓、其の擧動は沈着にして、些かたりとも輕卒に流るゝことなく、容貌、風姿、自ら靈魂の清淨なることを表はせり、又マリヤが他人と談話する時にも常に控目にして有益なることならでは語らず、些かたりとも無益なる物語をなすよりは寧ろ退きて默想、祈禱に耽るを好みたりき。聖エピフハニオの言ふ所によればマリヤは總て罪の危險より免れ居しにも拘らず尙常に其の目を戒めて、常に下を眺め、決して意を止めて人を眺むる如きことなかりき。又聖書はマリヤが其姉妹エリザベットを訪ねたるときも、可成的人を見ると又は人に見らるゝを避けんが爲めに態々山路を取りし

と見よ、要之マリヤの全身には完全なる謹慎の德輝きて之を見たるものは皆な清淨潔白ならむとの望みを起さゝるはなかりしと云ふ。

聖母に倣はんと欲する者は彼女の如く、先づ其の目を謹まざる可からず、之れ眼に依りて惡しき空想、慾望などの心に起ることゝ多ければなり、若しエワにして禁木の果實を見ざりしならば魔鬼に誘はれて是ら總ての慾を起さざりしなる可しダビドにして其の眼の慾を擅にせざりしならばかの所謂三つの大罪を避くるを得たるならん。

又「遵主聖範」の著者が云ひし如く、多く語るものが不識不知の間に其言語を愼むこと肝要なり、多く喋々するものは輕卒なる徵と云はれても解く術べある可からず。故に必要あるとき愛德を行ふときの外は特に多く語らず沈默を守るを可とす。其他マリヤに倣ふ爲めには、服裝、擧動其他一切態度に注意して他人に善き感を與ふるやう心掛く可し。然れども耳目、四肢、口舌等の肉躰を節するのみにては足らず、其の靈魂をも支配せざる可らず、單に外貌のみ謹慎めるものは奪る僞善者にして又單に內心のみに此德あるも充分なりと云ふ可からず、此二者は同時に存在するを要し若し一なくすれば他を得んこと難し。

千四百五十八年より千四百八十三年に至る迄波蘭土の王ヒリヒ聖カジミロは大に聖母を敬愛し其の光榮の爲めに

下の如き長き聖歌を誦へたり。

嗚呼我が靈魂はマリヤに感謝し盛に其の祝日を祝し、顯明なる德を謳ひ彼が尊き位を仰ぎて之を讃美し、母として又童貞として敬ひ名譽と幸福を頌へ歌ふ可きは勿論又罪障の重みより免れんが爲めに彼女を敬ひ情慾の急流に押し流されざらん爲め之れに祈る所あらん。

吾人は何人も充分にマリヤを尊敬するを得ざるを知れども、彼女を讃美せざる者は狂ならざれば愚なる可し。何人と雖も彼女を稱へ特に之を愛して絶へず尊敬し祈る可き也。

嗚呼衆女の光榮にして名譽なるマリヤよ天主は爾を萬物の上に秀でたるものとなし給へり慈悲深き童貞よ願はく

は絶へず汝を讃美するもの〻願望を聽き入れ又罪人を清めて天國の永福を享くるに堪ふる者とならしめ給へ、嗚呼聖なる童貞よ汝の力によりて天國の門は憐れむ可き罪人の爲めに開かれ古き蛇の奸計も汝を誘ふに由なかりき。汝は失望せる靈魂を癒し慰むる者なり、願はくは我等をして惡人の上に落ち來る可き災禍を免れしめ給へ、又我が爲めに天主に祈り我をして永遠の平和を味ひ、火の海の焰の中に投ぜらるゝの不幸なからしめ給へ、又我れをして貞操、謹慎、溫和、善良、質素、信神、正直にして用心深く、虛言を嫌ふ者たらしめ、何事も天意に合することを好み清淨を愛することを得せしめ善の途に於て堅固忍耐なる者とならしめ給へ。

吾人今や第二編の終に達したるが茲に一の面白き話しあり假りに之を顯出て之を說く可し、昔し一少年ありしが其父は貧困の爲めに此世を去りたりしに、其後數月ならずして母も亦同じく窮乏に堪えずして黃泉の客となりたりき。その時母は少年に向て『いざ我が愛する子よ、我が臨終にては思ひ殘さるゝは只汝のこと許りなり、心して常に溫良ならしめば我等は天國にて再び會ふことを得可し』と云ひける、かくの如くにして、此の少年は六歲のとき既に孤兒となりたりしが、ある慈悲深き隣家に引き取られて、厚き保護を受けたりしも尙ほ常に死せし兩親のことを思ひ、時々獨語して云ふやう『父上も母上も共に深く我を愛されしに、今我を棄てゝ天國に趣き給ひしを見れば、天國は必ず美はしき所なるに相違なし彼處には日々の麵包饒にして、人間寒さ飢ふ如きことなかる可しと思へば我も彼處に行きたし、嗚呼父母は何故に我を伴ひ給はざりしか』。

かく云ひて少年は家を出で終日歩み廻はりたりしが夕刻に至りてある村に着したるときは、疲勞と空腹との爲めに我知らず屋根に十字架のある家の門前迄來りて倒れたり、此家は恰も靈父の宅なりしが靈父は門前に人の呻吟く聲の聞ゆるまゝ外を窺ひしに即ち此の少年を見て『汝は誰にして、何所より來たりしや』と問ひしに無邪氣く答へて『我は

國に行たれば、我も其の後を慕ひて今日一日歩み廻はりたれど、天國のある所を知るを得ざるなり』と云ひければ、靈父は『憐れなる少年よ、我と共に來れ我等は共に之を搜す可し』と云ひて此の孤兒を引取り、養ふ事となりしが其後ヤコボが天國は何所に在るか、又何故彼所に彼を連れ行かざるかと尋ねる毎に靈父は天主に祈禱せよ、汝温良しき時は天主は必ず天國を見せ給ふ可しと云ひて、之を慰むるを常としたり。

少年も大に此の靈父に懷き、熱心に祈禱しつゝありしが、遂には何所よりも尤も聖堂に居ることを愛するに至り、諸聖人の額像などを眺るを好みしが己が拜禮想ひ出す故にやあらむ、幼兒耶蘇を抱ける聖母の像は彼が尤も愛する所となりぬ。然るに此像は木に彫刻されたる極めて古代の製作と覺しく甚珍しきものに相違なければ美麗なりとは云ふを得ず、聖母も聖子も非常に痩せて甚見窄らしげに刻まれありき、無邪氣なるヤコボは聖母が斯も痩せ給へるは必定餓死されしものならんと思たれば甚だ氣の毒に考へたるらしく、己れに與へられたる麵包を半を割きて、之を像の前に置き『善き母、善き耶蘇よ、我は我れの分を尙ほ多く持ち居れば遠慮なく之を食し給へ、以後毎日之程宛持ち來りて汝に與ふ可し』と言ひたり、暫くして後ヤコボは像のある所へ行き見るに先きに供へたる麵包は已に消へて見えざれば

『ヨゼフ』大に喜び毎日欠かさず之を供へたるが麵包は常に消え失せたりき。然るに不思議なることには幾日經つとも像は少しも以前より肥へたる樣子なき故怪しみ乍ら委細を靈父に物語りければ、靈父は笑ひて、聖母の像は汝の麵包を食するを得ざるなりと答へしに少年は眞面目に『否像は凡て我の與へしものを食したり』と云ひければ靈父は犬に驚き、且怪しみ之れを確かめんと欲し、少年に命じて例の如く麵包を供へしめ、彼が聖堂を去りたる後、自らは堂の隅に隱れて樣子如何にと窺ひ居たり、然るに間も無く、私かに歩む足音の聞ゆるに、よく見れば繦褓を纏へる小兒あり、聖母の像に近づき、かの麵包を取りて袂に入れ、叮嚀に禮を施し

たる後歸り行かんとするに、靈父は隱所より表はれて、此の小兒を捕へたり。小兒は恐怖の爲めに慄ひ戰き乍ら『靈父の君よ、我は決して盜人にあらず、我は只日々聖母が我に與へ給ふ麵包を受くるが爲に來るのみ』『汝は如何にして聖母が汝にそを與へ給ふを知りたるか』『我は家々に行きて食を乞ひたれど何所にても拒まれたるに今は餓死せん許り、力なくも聖堂に歸へり、熱心に聖母に祈願して食を求めたり、然るに祈禱終りて像の傍を見れば一片の麵包あり即ち聖母の賜物と信じて之を受け以後毎日かくの如くして今日に至れり』

『ヨゼフ』がかくの如く(中略)して憐れなる少年を養ひしは、全く天

第十二章　マリヤの聽慢と洗獸

主を養ひ奉りしと同樣にて、自ら受くるが如き慈善を他人に施したるものなれば、マリヤは必ず彼を導きて、天國に入らしめ、其の永遠福樂を享けしむべきは疑なし。

聖母崇敬の道　終

附錄　聖母マリヤに献ぐる祈禱

我身及び我國の爲めにする祈禱

嗚呼、マリヤよ、我等は公教信者として、又日本國民として、心を盡し、爾に仕へ奉らんと欲す。吁、我等の元后にして母なるマリヤよ。我等が不斷多くの危險に瀕めるを憐み給へ。願はくは我國の爲め、我家族の爲め、且は我身の爲めに祈り給へ。

尙ほ我等の眼を遮蔽る暗黑を開き、我等を誘惑する幻影を遠ざけ、我等を支配する僻見を打破り、又我等を地獄に陷れんとする敵を抑制られんことを祈り。天主が我等をして現世に於ても、後世に於ても、幸福ならしめ給はんことを祈り

給へ。

聖アロイジオ聖母に祈る詞

至て聖なる童貞マリヤよ。爾は我が指導者にして、且我が元后なり。我は爾の深き慈悲の中に我身を投じて、今日より永遠に、我が霊魂、我が肉身を、爾の大なる守護の下に置かん。爾の至聖なる取次と、功徳に依りて、我がなす凡の事業が、御意に叶ひ、又聖き御子に喜納せられむが為めに、總て我が希望、慰籍、苦痛、困窮、並びに我が生涯及び死をも、全く爾に委ね爾の手に托ねんと欲す。

純潔の徳を求むるの祈禱

此の祈禱文は本書第百七十五頁にあり。

臨終を善くせんが為めにする祈禱

至聖なる童貞よ。我が臨終の近づきて語る能はざるに至る時には、願はくは我が為めに語り給へ。御子基督が、多くの苦痛を以て贖ひ給ひし、我が憐むべき霊魂の為めに、天生の憐愍を祈り給ひて、其が我が肉躰を離れんとするとき、之を受け、審判者の前に呈し給へ。我が臨終の床に在りて、冷き汗全身に流るゝを覺ゆる時、我が両眼將に暗からんとする時、我が心臓の鼓動漸く弱く且緩くならんとする時、さては壓へられたる胸に呼吸使ひの苦しく感せらるゝ時には、來りて我を扶助け、我をして爾を思ふことを得せしめ、我唇をして永遠に愛さるゝ爾の御名を尊敬、信用及び愛を以て、囁く

を得せしめ給へ。亞孟

同じ祈禱（聖ソゴリの禱文）

吁、煩悶る者の慰籍者よ、死の際に我を見棄て給ふこと勿く、却つて平常よりは更らに屢爾に祈願し得るの聖寵を得せしめ、我をして、爾及び聖子のゆかしき聖名を誦へつゝ、此世を去るを得せしめ給へ。吁、母よ我が、禮を知らざるを咎め給はずんば、我れに尙ほ願ひあり。我が將さに最後の呼吸を引取らんとする前に、爾自ら我に來り給へ。之れ爾の來臨は既に我れを慰むるに充分なれば也。爾は嘗て、爾に仕ふる者の多くに、此の恩惠を與へ給ひたれば、我も亦之を望み、爾が必ず之を下し給ふべきことを信ず。我はもゝ罪人にして、此の惠を受くるに足らず、されど我も亦爾の僕にして、深く爾を愛し、厚く爾を信ずるものなり。吁、マリヤよ我爾を待てば、此の慰籍を我に與ふることを惜み給はざれ。

福者ヴイアンヂーマリヤに祈る文

嗚呼原罪の穢れ無くして宿り給ひし童貞よ、爾は凡て爾の欲する所を天より得給へば、我等をして、熱き信仰、深き謙遜汚無き清淨並に最も輕き罪すら大に恐怖る心と、爾及び聖子に對する盛なる愛とを得せしめ給へ。爾を愛する者は必らず救けらる可ければ、聖子に願ひて、我等に天主の赦宥を得せしめ給へ、此の世にある間、特に臨終の際に、我等を守護し、煉獄に苦しめる我等が同胞を一刻も早く免れしめ、彼

等が永遠の光明に浴することを偏へに願ひ奉る。

煩悶者の慰籍なる、マリヤに向ふ祈禱

吁、煩める者の慰籍者なるマリヤよ。我は爾の慈愛深く同情に富む御心に依靠り奉る。母の心が其子の苦悶を感せざることは、未だ嘗てあらざれば、爾は熟く我が煩める所以を知り給はん。吁我が母よ、我は爾を愛す、願はくは如何に我が苦しみ艱めるかを見て慰籍を與へ給へ、吁マリヤよ、願はくは、爾の御保護に依りて、天主が我等に靈魂及び肉身の健全、現世未來の歡喜を與へ給ひ、又我等を保護し、我等を守り、我等を慰め給はんことを、且最後に天主が我等を天上の樂園、即ち涙も無く、悲しみもなく、苦痛もなくして、只終り無き福祉を喪ふことなき快樂のみ有る所の、天國に入らしめ給はんことを願ひ奉る。

母が其子女の爲めにする祈禱

嗚呼天主の母にして又我等の母なるマリヤよ。爾は凡て世の母たる者の、感嘆す可き龜鑑に在せば、我は我が子を爾の保護に托せ奉る。爾は我が如何に深く我子を愛するか、又我が彼等に與へんと欲する凡ての者を知り給へり。されど、我は力薄くして何物をも有たず、又何事をもなし得ず、故に我は偏へに爾に依靠り奉る。爾も亦實に我子女の母に在して、我よりも更らに深く彼等を愛し給ひ、且つ、彼等に必要なる凡ての聖寵を得せしめ給ふことを得可し。我は我子等を爾に

托せ奉れば、願はくは、彼等が爾を深く愛し、決して罪を犯して爾の聖き御子に背くことなからしめん爲めに、聖寵を得せしめ給へ。彼等を凡て肉身上、靈魂上の危難、不幸より免れしめて、敬虔、從順、勤勉なる者たらしめ、現世に在りては、眞正の信者として天主に仕へ、天國に於ては、凡て我等が爾と共に幸福に在ることを得せしめ給へ。

附錄終

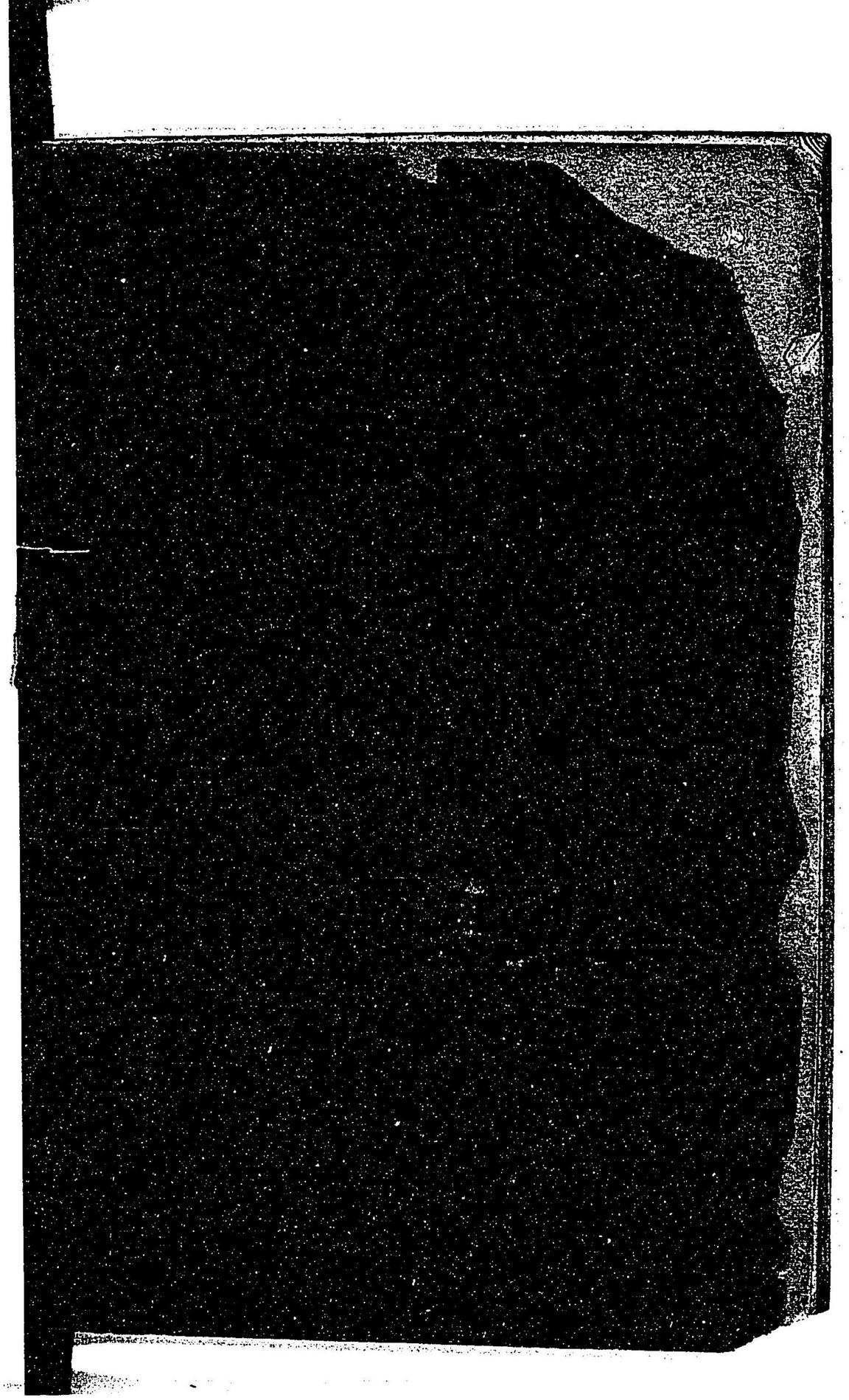
明治三十八年五月二十五日印刷
明治三十八年五月二十九日發行

原著者　横濱市山下町八十一番地　ルマルシヤル

飜譯兼發行者　東京市本郷區蓬萊町七番地　村上春一

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社



020940-000-1

特61-882

聖母崇敬の道

ルマルシャル／著

M38

ABI-0792